

city @ life

都市のしくみと暮らし

no.125

Apr. - Jul. 2019



特集 オープンスペースからのまちづくり

巻頭言

オープンスペースの「価値」とは

建築家の槇文彦氏は、2015年に『新建築』誌上に発表した論考「Another Utopia」において、「施設からではなくオープンスペースにクリティカルな重要性をまず与える、あるいは、施設配置と並行して計画を考える際にも、施設と同等の重要性をオープンスペースに与える姿勢があってもよいのではないか」との問いを投げかけた。

槇氏の問いかけは、ニューヨーク、ミッドタウンにある「ブライアント・パーク」の成功とも底通する。1980年代、荒れ果てた暗い空間だった公園をリニューアルしたことで、緑豊かな都会のオアシスが誕生すると、周辺のオフィスビルの不動産価値も向上した。このため公園の恩恵を受ける周辺企業やビルオーナーが公園整備費を負担すると共に、官民による管理・運営組織も発足させた。

ただしオープンスペースの「価値」は、地域の地価向上なのか、安全性なのか、誰もが自由に集える空間であることなのか、どのように捉えるかにはさまざまな見方がある。管理が規制へ行き過ぎればジェントリフィケーション問題にもつながりかねない。

今回はこれらを踏まえつつ、オープンスペースを、さまざまなポテンシャルを^{はら}孕む自由な場所と位置付け、そこから発想する都市、まちづくりのあり方を考える。(編集部)



表紙——姫路駅北駅前広場「キャッスルガーデン」
(関連記事:p20)
裏表紙——木津川遊歩空間「トコトコダンダン」
(関連記事:p17) photo:坂本政十賜

特集 オープンスペースからのまちづくり

contents	対談 オープンスペースは都市のユートピアになり得るか 槇文彦×陣内秀信	2
	ケーススタディ オープンスペースが都市を楽しくする オープンスペースの可能性を検証する場として SHARE GREEN MINAMI AOYAMA ソニービル創業以来の理念「街に開かれた施設」を継承 Ginza Sony Park 再開発で生み出した「オープンスペース」を活かす仕掛け WATERRAS (ワテラス) 「カミソリ堤防」から、街と人をつなぐ防潮堤公園に トコトコダンダン (木津川遊歩空間) トランジットモールが街に賑わいをつくる 姫路駅北駅前広場及び大手前通り	8 11 14 17 20
	ルポ 図と地、価値の反転 建築とオープンスペース	23
	連載 Let's Greening! 緑のまちづくり③ 循環型の農園カフェを目指す、野菜・果物畑	30
	連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑥ ドレミ保育園 防災意識を高め、子どもたちの「命を守る」	32
	連載 噂の「駅前」探検③ 川崎駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜	34
	back number・information	38

オープンスペースは都市のユートピアになり得るか

都市の公共空間やコミュニティのコモンスペース、あるいは、住宅の庭園や中庭など、世界の文化圏には、さまざまなオープンスペースが存在する。どのオープンスペースにも、歴史が育んだ人間と都市との深いかわり合いが刻まれている。建築よりも長い歴史をもつオープンスペースから、改めて都市を捉え直そうという榎文彦氏の提言を受けて、都市のフィールド研究を通してさまざまな文化のオープンスペースを見てきた陣内秀信氏と語り合っていた。

photo:坂本政十賜(ポートレートのみ)

榎文彦

建築家/榎総合計画事務所代表

陣内秀信

法政大学特任教授/本誌企画委員

生活や暮らしが外へはみ出す場所

榎——オープンスペースについては、いろいろな見方や考え方があると思います。陣内さんはイタリアが専門ですが、中国や中東にもよく足を運ばれたようなので、そのあたりのこともお聞きしたいと思っています。

陣内——だいぶ前になりますが、90年代前半に、清華大学の朱自煊教授と組んで両方の研究室の学生たちと北京の旧市街の調査をしました。近年の急速な経済発展でやや変わったかもしれませんが、北京の胡同、フートンと言うやや広めの路地が実に素敵なんです。通過交通が少なく、クルマがあまり入ってこないのが、近隣の人がもっぱら使う空間です。そういう胡同が、北京

には何本もあるんです。町中に張り巡らされている感じです。

榎——僕も行ったことがあります、確かにたくさんありました。

陣内——胡同に面して、敷地の四方を壁で囲み、中庭のまわりに四つの建物を配置する建築様式が四合院しごういんですが、この中庭と周囲の胡同が連動して一種のセミパブリックな場になっていて、住人たちの憩いの場になっているんです。榎さんのおっしゃるまさに近隣住民のためのオープンスペースです。

榎——建物は中層か低層?

陣内——北京の伝統的な建物は、ほとんど平屋です。胡同には生活感がありました。縁台を出して将棋をやっていたり、親が子どもの髪を切っていたり、

共同トイレがあったり。オープンスペースがあると、住人たちが、知らず知らずに外へ出てくる。生活や暮らしが、家の中からはみ出してくる感じですね。自然にコミュニティが生まれますよ。

榎——中東も同じような感じですか。陣内——中東の都市構造はちょっと違い求心的で、都市の中心部に公的な空間があります。大モスクとそれを囲むようにバザールとかスークという市場が広がり、店舗群の背後にキャラバンサライとかハーンと呼ぶ隊商宿がとられ、活気ある商業空間になっています。道という道が、みんなその中心部に向かってできている。中心が公的空間で、ヨーロッパのような堂々たる広場はないのですが、人を結びつけ社会化させるコモンcomonの空間は少し隠れて別の形で存在します。

ヨーロッパの都市は、市庁舎が大聖堂があってその前に象徴的な形の広場があるというのが典型的です。歴史的な街というのは、どこもヒエラルキーがうまくできていますね。市庁舎は政治的な場所ですが、その前の広場には、時々露店いぢ市がたったり、儀礼やスペクタクルが行われ、市民の一体感を生み出す場になっています。政治的な場と庶民の場が分離しながらも共存しているわけです。

榎——代官山ヒルサイドテラスでも季節ごとにマーケットが開かれます。最近はいろいろな人が参加してくれて、けっこうバラエティ豊かなんですよ。陣内——そうですね。

榎——北川フラムさんの事務所が入っているので、その関係もあって越後妻有えちごつまり(十日町・津南町)から農産物をいっぱい持って来たり。フランス料理店

もあるので、フランス人に呼びかけてフランスの物産展をやったり。

陣内——榎先生もどこかに書いておられましたが、最初から広場だったわけではなくて、だんだんとそういう使い方をするようになったようですね。

榎——そうなんです。そういう風になっていったところが面白いでしょ。

実は代官山T-SITEがつくられた時もそうでした。あの場所には大樹があって、あれは残した方がいいよ、ということになった。設計者のクライン・ダイサム・アーキテクトが建物を道路からセットバックさせて、その大樹を守りながら、ベンチなどを設置して寛げるスペースをつくったんです。敷地の奥に人を呼び込むために、路地もつくりました。路地幅を広くして、テーブルや椅子を置いたりして。

陣内——T-SITEができる前は、塀に囲まれた大きなお屋敷で、中がどうなっているのかまったくわからなかった。これからどうなるのかなと思っていたら、あんなに素敵なオープンスペースのある場所に生まれ変わって、とても驚きました。

ヴェネツィアの二つの広場

榎——僕は、以前から日本の大都市は、都市形態学的に見ると「皮」と「あんこ」でできていると言っているんです。「皮」とは比較的広い道のここそこに立派な高層の建物が立ち並ぶところを指し、一方「あんこ」とは、その大きな皮に囲まれた内部を指します。普通は、皮の方は立派な建物や高層の建物が建ち、それに比べてあんこの部分は狭い道が複雑に入り混じるごちゃごちゃしたところ。ところが、ヒルサ



●T-SITEの道路脇の風景

イドテラスはちょっと違って、皮にあんこが引っ付いている感じ。日本の都市としては珍しいケースだと思っています。

陣内——榎先生は、ヒルサイドテラスの背後にある旧朝倉家住宅の保存シンポジウムの基調講演で、こんなことをおっしゃっていました。東京の都市はとにかく変化が激しくて、市街地も建物も安定していない。だからアイデンティティが感じられないし、愛着ももてない。一方、お屋敷が建っていた場所、大地というのは、安定感があって、それ自体掛け替えのない場所になっているというんです。ただ、そういう場所が生き残るには、それなりに努力も必要だし、そういう努力なしに自然に残っていくことはない。僕もまったく同意見ですね。

榎——皮にあんこが引っ付いているようなヒルサイドテラスが、なぜできたのかといえば、やはりこの土地所有者の努力があったから。大正時代、この街の大地主が、これからの道は立派でなければならないと考え、自己の所有地の一部を区に提供し、しかし、密度を高くすることを好まなかった結果生まれた場所です。安定した、言い換えれば皮にあんこが引っ付いているような場所がもっと増えるといいなあと思います。



●テーブルを置いた中央分離帯
photo: 野口浩史

陣内—そういう意味では、昭和初期につくられた同潤会アパートのオープンスペースは良かったですね。中庭を囲う中層のモダンな建物も魅力的でしたが、それぞれの地域にふさわしいオープンスペースをもっていましたから。伝統的な路地にかわる近隣住民のための新しいコモンだと思いました。中でも、代官山の同潤会アパートは、斜面地に森にすっぽり包まれて建てられていましたから。

榎—今は、広い空き地と高層住宅です。

陣内—隣棟間隔をほどよく空けて、オープンスペースがいい形に分散してつながっていたのに。

榎—道路を拡幅して、長い中央分離帯をつくってしまった。ただ、ちょうど1999年からヒルサイドテラスを中心に「代官山インスタレーション」というイベントをやっていたので、2005年の案ですが、この中央分離帯を使って、長いテーブルと椅子を置きました。

陣内—さぞかし面白かったでしょう。

榎—インスタレーションですから今はありませんが。

陣内—そういうオープンスペースの活用法は、欧米人の方が上手いですね。

榎—イタリアだったら、それこそフェリーニの映画のように仮装舞踏会なんかやったかもしれない。

陣内—活用法の上手な例としては、やはりヴェネツィアのサン・マルコ広場でしょう。榎先生もよくご存じのヴェネツィア建築大学のフランコ・マンクーゾさん。彼が言うには、サン・マルコ広場は、広い水面に開かれた小広場と内部の大きな広場がL字形に連結し、その特徴であるリストン(床面に施される白いライン状の舗装)を辿って歩くというのがヴェネツィア市民の楽しみになっていたそうです。サン・マルコ広場は今では観光客ばかりですが、本来、散歩したくなる空間だったと言うんですね。こういう「人間の行為」を引き出すような仕掛けをつくるのが本当に上手いんですよ、イタリア人は。

榎—彼らの文化なんでしょうね。

陣内—茶目っ気もありますし。現在の形ができあがるまでに1000年の歳月が費やされたのですが、もとをたどれば、12世紀までは、現在のほぼ半分の大きさで、木造の質素な建物が一部を囲む単なる空地にすぎず、西の方にはぶどう畑が一面に広がるような場所でした。本格的な拡大・改造を経た後も、15世紀の版画を見ると、宿屋やパン屋といった質素な小さい建物が並び、小広場の水際の円柱の近くには下町的な肉屋などの露店市が立っていたことがわかります。このような段階を経て、サン・マルコ広場は人間の意志によって計画的につくられていったのです。一般市民の住居は、ここにはありません。宗教の中心サン・マルコ寺

院、政治の中心総督宮、官僚機構を支える旧政府館、さらには、金融の中心造幣局と文化の中心図書館が雄姿を誇り、サン・マルコ広場は公共建築のみで構成された、ある意味で生活臭さを完全に排除した虚構の世界です。

榎—逆に生活の臭いがプンプンするような庶民的な広場が確かヴェネツィアにはあったような気がします。

陣内—カンポのことですね。イタリア語で田畑を意味する広場で、市民の日常生活の中で親しまれている広場です。カンポは、その言葉が示すように、広場としてつくられた空間ではありません。菜園などを宅地が取り囲む過程で、広場の体をなすようになったのです。サン・マルコ広場のピアッツァとは、意味も性質もまったく異なるもう一つの生活密着型の広場です。その典型がサンタ・マルゲリータのカンポです。周囲を取り巻く建物は公共建築ではなく、1階が商店で2階が住居のごく普通の建物です。もちろん生鮮食料品を中心とする露天市が立ち、広場を囲む建物には居酒屋やカフェ、パールといった飲食店が入り、終日老若男女を問わず地元民で賑わう場所になっています。

世界中の旅行者が集うサン・マルコ広場、地元民が普段着でいつでも気軽に集まれる庭のようなカンポ。これら二つの対照的な広場は、人々が集い、楽しみを共有する場という意味では、日本の今後の都市にとっても不可欠な空間だといえますね。

アラブ・イスラム世界とネットワークの深い関係

榎—陣内さんは中東にもよく行かれています。冒頭おっしゃっていました

が、中東の広場も面白そうですね。

陣内—1991年に1年間ヴェネツィアに在外研究で滞在していた時に、研究室の学生と一緒にアレppoとダマスカスを調査したんですが、とても興味深かった。残念ながら今は行けません。榎—シリアには自分も思い出があります。1958年にダマスカスを訪ね、翌朝タクシーでゴラン高原を抜け、夕方ペイルートに着きました。そこから生まれて初めて地中海を見て感動したのをよく覚えています。平和な時代でしたね。

陣内—そうですね。先ほど言いましたが、中央に大モスクがありまして、その大きな中庭は広場そのものといってもいい開放的な場所です。権威をもつ西欧の市庁舎とは雰囲気の違い、そこでおしゃべりしたり昼寝をしたり、子どもたちが遊んでいたり。とにかくたくさんの人たちが集まってきて、何かしているんですね。面白いのは、大モスクを取り囲むバザールやスークの巨大な市場空間を見ると、榎先生の言われる道路沿いの「皮」の部分には小さな店がぎっしり並ぶのに対し、その「あんこ」の部分に中庭型のキャラバンサライが建ち並んでいることです。

キャラバンサライ、ペルシア語で隊商宿を意味し、アラブ世界ではハーンと呼びますが、要するに引き寄せや宿泊をする施設で、どこも中庭をもっているんです。つまり、中庭付きの宅邸



●1958年ごろのペイルート

を想像していただければいいと思います。それが、商業空間にたくさん建っている。キャラバンサライは、人だけじゃなくてラクダなどの動物も一緒に寝泊まりします。その居心地のよい中庭に男どもが集まってきては、仕事の合間にパチャクチャおしゃべりしているわけです。同時に、道に開いた路面にコーヒー店があり、やはり男どもの格好の居場所になっています。

余談ですが、パリのカフェテリアは、どこも街路に向かって椅子が並んでいるでしょ。おそらくその原型は、ダマスカスあたりのアラブのコーヒー店じゃないかと思っています(笑)。

榎—賑わいも生まれてくると。

陣内—アラブ・イスラム世界は、ネットワーク社会と言われ、都市内部ばかりか、それぞれ地中海を挟んであらゆる都市や地域がネットワークで結ばれているといわれています。

榎—もともと移動をする人たちですから、ネットワークがインフラになっているんでしょうね。

陣内—とくに地中海人はみんなそうです。行く先々に知人がいて、常にネットワークを通じて交易を発展させたのです。そういった外のネットワークもありますが、面白いのは都市の内部にも、日本の町内会のような、ハーラ(近隣地区)というしっかりしたコミュニティの緊密なつながりをもっていることです。道が複雑に巡って構成され、それに沿って中庭型の住宅が並び、伝統的にはそこに血のつながりのある大家族が暮らしてきたのです。イスラムの伝統社会では3世帯同居が珍しくなく、つまり、結婚した息子たちの家族が両親と中庭を囲んで同じ家に住み、空間をシェアしているわけです。女性



榎文彦

まき・ふみひこー1928年東京生まれ。建築家、榎総合計画事務所代表。主な建築作品に、〈ヒルサイドテラス〉、〈スパイラル〉、〈幕張メッセ〉、〈風の丘斎場〉、〈4WTC〉他。著書に、『アナザーユートピア「オープンスペース」から都市を考える』(共著、NTT出版、2019)、『残像のモダニズム 「共感のヒューマニズム」をめざして』(岩波書店、2017)、『漂うモダニズム』(左右社、2013)他。

たちも近隣の友人を呼んで、中庭で大騒ぎをするんだそうです。中庭はまさに家の広場で、生活環境にゆとりと豊かさを生み出しました。複雑な迷宮的な地区の構造は治安の上でも優れていたようです。

榎——中庭が非常に有効に機能している。祭事なんかにも利用されるんでしょうね。

陣内—まさにそうで、宴会、祭礼の際の屋外の大広間の役割をもちました。

一方、南イタリアでは、袋小路の周囲に10家族ほどが小さな家に核家族として住んできました。日本の長屋が並ぶ路地より広く、その居心地のよいオープンな空間が近隣住民のコンスペースになっているわけです。シチリアのパレルモの例ですが、袋小路が結婚式の祝宴の舞台となり、ギターを弾く歌手を招いて盛り上がっている情景を伝える古い写真を見たことがあります。オープンスペースがセミパブリックな空間になっているんです。

榎——ヨーロッパでもアラブ・イスラム文化の影響が強かったところとそうでないところがある。

陣内—おそらくアルプスの北側と南側では、オープンスペースの意味も形態も違うのかもしれない。

榎——やはり北よりも南でしょうね、影響を強く受けているのは。

陣内—スペインのアンダルシア地方に行くと、本当に中庭が美しく、鉢植えがたくさん置かれています。家屋の屋根に落ちた雨水を水槽に集めて、植物の水遣りに利用しています。これなどはオープンスペースと人間の暮らしが密接に結びついている良い例だと思います。しかも、近隣の住人たちが集まるコミュニティスペースにもなって

いる。

北の方、たとえばドイツやベルギー、オランダも大聖堂や市庁舎を中心に大きな広場があります。マーケットなどもあるんですが、そうした広場の他にみんながちょっと集まれるような近隣のコンスペースのような場所は少ないようですね。個人主義が強いからでしょうか。

日本の都市の特殊性を生かす

陣内—ヨーロッパのオープンスペースを見ていていいなあと思うのは、近年、クルマを締め出しどんどんその価値を高める努力をしていることです。ところが日本では、反対にますます低くなっている。

榎——そういうものに価値を見出せなくなりました。ただ、ここには日本の都市空間の特殊性もかわっていると云うんです。

日本は、都市と農村がヨーロッパのように対立していない。また、自然とも緩やかにつながっています。ヨーロッパには、都市に住む以上、都市とはこうあらねばならないという強い意志のようなものがありますが、日本にはそれがありません。少なくとも表面には出てこない。ヨーロッパでは当たり前前の国家と都市の対立もないですね。都市を堅牢な城壁で囲むなんてことは、日本ではあまりやりません。

日本では、農村から都市に移り住む場合、農村のいろいろな社会的風習、習わしみたいなものを平気でもってきますよね。つまり、農村の生活をそのまま都市へもち込むわけですが、外国人にはそれが、すごく不思議に見えるらしいんです。ヨーロッパではまずそういうことはしません。だからかもし

れませんが、日本人は、都市に対する思い入れも希薄です。古い建物を大事にしようという気持ちもなくて、壊して建て直すことにほとんど抵抗がない。

陣内—都市構造そのものがそうですよね。どんどん変化していくし、崩すのも平気です。しかし、本来、日本にもこの国固有の素晴らしいオープンスペースづくりの経験がありました。京都の景観や風俗を描いた洛中／洛外図を見ると、ヨーロッパの都市でいえば市壁にあたるその内側が洛中で、その外が洛外になりますが、いわゆる人々が訪ねる名所は、ほとんど洛外にあるんです。ヨーロッパのように城壁の外側はみな危険という世界だったら、ありえないことですよ。平気で都市の外へ出ていくわけですから。確かに平和を享受できた日本は独特だと思います。

榎——都市に対する意識が違うんでしょうね。

陣内—旅行ガイドなどを見ると日本には名所と呼ばれるところがいっぱいあるのがわかりますが、江戸時代の名所と明治の名所は、少し変わるんですよ。榎——数が増えるとか？

陣内—もちろん増えます。洋館建築なんか名所になりますから。ところが、消えちゃう名所もあるんです。

榎——名所がなくなるということですか。

陣内—今言ったような洋館建築が名所になったところは、建物がなくなると名所でなくなるわけです。なので、明治にできた名所は短命に終わり、一方、江戸時代に愛され親しまれた名所は、いつまでも残る。

江戸時代の名所は、山や地形との関

係が密で、水、緑などの自然要素との結びつきも強く、また、精神性も感じられるので、人々の心に残りやすいんだと思うんですね。こういった古い時代に生まれた名所の方が、21世紀、22世紀まで残り続けると面白いですよ。まあ、大概そういう名所は、丘の上の条件のよい場所であって、榎先生がよく言っておられる寺社や大名屋敷跡だったりするわけで、都市の重要なオープンスペースになっています。

そういえば、いわゆる斜面緑地もオープンスペースという意味では貴重な場所です。ホテルニューオオタニや赤坂プリンスのあった紀尾井町とか椿山荘がある文京区関口辺りとか。国分寺崖線なんかもそうだと思いますが、まさに東京の宝だと思います。水が湧き出す聖なる場所でもありますから。

榎先生は、ご著書『残像のモダニズム』で「都市や建築の最終目標は人間に喜びを与え社会性を獲得するところにある」とおっしゃっておられます。本当にそうだとつくづく思ったんですが、オープンスペースというのは、まさにそういう場所で、人々に喜びを与える場所です。

榎——うちの事務所にいらした時に、気づかれたと思いますが、入り口に小さな広場があったでしょ。最近、あそこで昼寝をしている女性がいたんですよ。あの広場は、建物をつなぐパッサージュになっていて、外部とも内部ともいえるような空間です。どんな使い方をしてもいいんですが、まさか昼寝の場所になるとは思いませんでした(笑)。

陣内—まさに想定外の使い方。ヒルサイドテラスには、大小さまざまなオー

プンスペースがありますが、そういう自由な発想を抱かせる場所でもあるんですね。

かつて下町では、しょっちゅう縁日があったり、楽しいイベントがたくさんありました。大人も、子どももみんな路地や広場に出てきて、外で生活する時間の方が長かったんじゃないかと思うくらいです。その場所に暮らすということは、家に住むというだけじゃなくて、街に住むという感じです。今、この街に住むという感覚を思い出して欲しい。

榎——僕も子どもの頃、家の近くの原っぱで友だちと存分に遊んだ記憶があります。あのささやかな空き地の風景が今も胸に浮かびます。こういうオープンスペースの記憶、経験が人間にとってとても重要なんです。オープンスペースから都市のあり方を考えてもいいんじゃないかと思う理由です。

陣内—日本では、相変わらずビッグスケールの開発が活発です。でも、僕はもっと小さなヒューマンスケールの開発にこそ期待しています。榎先生のおっしゃるあんな部分を活かしたオープンスペースをうまく取り込んだ空間。そういうアイデア、プランをどんどん出して欲しい。

榎——僕がオープンスペースの国際コンペをやったらどうかと提案しているのは、まさにそういう意味です。オープンスペースには、それだけのポテンシャルがあります。

陣内—誰もがいつでも自由に使える空間。何が起こるかかわからないけれど、とにかくワクワクする空間。そういう場こそ、人間に本当の喜びを与えてくれるんだと思います。



陣内秀信

じんない・ひでのぶ—1947年福岡生まれ。法政大学特任教授、建築史家。工学博士。著書に、『東京の空間人類学』（ちくま学芸文庫、1992）、『イタリア都市の空間人類学』（弦書房、2015）、『水の都市 江戸・東京』（講談社、2013）他多数。

オープンスペースが都市を愉しくする

地域や都市に新たな魅力と価値を与えるオープンスペースとは、いったいどのような場所なのだろうか。近年、建築や都市の再開発の中で、人々が集い、交流し、賑わいを創出する場としての役割を期待されているオープンスペースだが、単に開かれた空間があれば良いだけでもなさそうだ。オープンスペースと建築、そして街がつながり、新しい価値や豊かさが誕生している現場を訪ねる。

オープンスペースの可能性を検証する場として

SHARE GREEN MINAMI AOYAMA 東京都港区南青山

取材・文：村田保子 photo：坂本政十賜

将来の有効活用に向けて、期間限定でエリアの魅力を体現

春間近のうららかな日差しの中、芝生広場でくつろぐママと小さな子どもたち。犬の散歩をしている人も、施設内にあふれるユニークな植物を楽しみながら歩いている。2018年10月にオープンした「SHARE GREEN MINAMI AOYAMA」では、日々このようなのどかな風景が繰り広げられている。青山一丁目の駅から徒歩4分ほどの都心とは思えない光景だ。

この場所は、NTT都市開発が所有する土地だが、都市計画上の指定により、大規模な開発には制約がある。長年にわたり、運送会社の物流倉庫や住宅のモデルルーム用地として、仮設的な活用がされてきた。この状況を「もったいない」と感じていたと話すのは、NTT都市開発の宗慎一郎さん。近年、東京都の「公園まちづくり制度」など

が創設され、条件を満たせば、この敷地も事業として開発ができる可能性が出てきた。しかしそれにはまだ時間がかかる。将来のさらなる有効利用に向け、この場所の価値の本質を探る目的で、今回の「SHARE GREEN MINAMI AOYAMA」をつくることにしたという。

「南青山一丁目は、外苑前、表参道、赤坂、六本木などの個性的なエリアに囲まれた住宅地で、現時点では、周囲の他のエリアに比べると色のないエリアです。しかも、都心でこれだけ広い空が見える場所はなかなかありません。霊園や御用地の緑にも囲まれた自然体な空気感はこのエリアの根底にある魅力。将来的にはそれを中心としたまちづくりを展開したいと考えています。まずはそれを小さく体現する場所として、緑をテーマにした施設をつくりました」と宗さん。



●NTT都市開発株式会社開発本部開発推進部担当課長代理の宗慎一郎さん

何もない広場をつくることで、何にでも使える場所にできる

大規模な予算はかけず、何にでも使えるオープンスペースを中心とした施設にするという基本方針を決め、倉庫や関連会社が入っていた二つのオフィス棟などの建物も既存のまま流用することにした。この段階で、パートナーとしてリアルゲイト及びトランジットジェネラルオフィスが企画から参



上●入り口のアーチや植栽を始め、敷地内の植物は「SOLSO FARM」が手掛けた
右●大きな空と芝生が広がる「GRASS SQUARE」。芝は天然と人工がミックスされたハイブリッド芝を採用。広場に面してカフェやグリーンショップが並び

加。賑わいを生み出すためのカフェの運営、人気の植物ショップ「SOLSO FARM」の出店などをコーディネートした。オフィス棟は区画を小さめに分け、シェアオフィスとして整備し、豊かな自然を感じて働ける場所に。屋外の「WORKER'S GARDEN」では、テーブル、電源、Wi-Fiも完備し、緑に囲まれた環境で仕事や打ち合せをすることも可能だ。



「商業施設だけでなく、働く場所や暮らす場所が混在し、さまざまな人が集い、緑豊かな環境と融合していく施設をつくっていききたい。ここがゴールならターゲットを絞って特徴をとがらせる選択もあったかもしれませんが、将来へつなげるため、さまざまな世代や属性の方に来ていただき、どういう可能性があるのか検証していく。そこから自然発生的に生まれるものから、この街をどの方向にもっていくべきかが見えてくると考えています」

目玉となるオープンスペースは、もともと真ん中にあったアスファルトの空地を活かし、芝生を敷き詰めた広場「GRASS SQUARE」として整備した。しかし、本当に何もない広場にするについては、かなりの議論を重ねたという。

「オープンスペースにするとしても、



左上●パーゴラとテーブルが配されたエリアも。来訪者がくつろいだりランチを食べたりと自由に使える
左下●「SOLSO FARM」が都心型グリーンショップとして出店した「SOLSO PARK」。緑豊かで開放感のあるオープンスペースと親和性の高い業種として参加
上●子どもを安心して遊ばせることができる「KIDS GARDEN」

植栽を設けたフォトジェニックな空間にしたほうが間延びせず、スポットとしての価値も高まるという意見もありました。しかし、都心で見える大きな空と広々とした空間を実感できるという、当初のテーマは大切にしていきたいと思いました。さらに、何にでも使える空間でさまざまなアクティビティを起こしていくことで、この場所の価値を高めていければと考えています」

何もない広場にすることで、子どもたちが走り回れる場所になり、想定以上に親子連れの利用が多くなっていることにも、手応えを感じているという。カフェやショップを楽しみながら、子どもを遊ばせることができるため、親にとっても居心地の良い場所になっているようだ。ただ、たとえば空が広く見えるだけなら、ビルの屋上庭園でも同じかもしれない。しかしここでは、地続きの土地が広場として開かれていることも、心地よさや安心感に関係しているように思える。

安全性と地域への配慮。課題の先に見えてくる未来

親子連れを始め、多くの人から好評を集める人気スポットとなった「SHARE GREEN MINAMI AOYAMA」だが、オープンスペースを快適



左●電源やWi-Fiを完備した「WORKER'S GARDEN」。シェアオフィスのワーカーへ緑の中で働くことの心地よさを提供している
 上●トランジットが手掛ける「Little Darling Coffee Roasters」。倉庫の躯体を活かしたインダストリアルな空間

で安全に楽しんでもらうための配慮は、開発時から入念に検討を重ねてきたという。たとえばトゲのあるサボテンなどをどう安全に配慮しながら配置するかといった検討を行い、デザインと安全性の両面から納得のできるものを目指した。また、「GRASS SQUARE」内での禁止事項も細かく設定し、案内板として園内の各所に掲示している。



上●敷地内にあるシェアオフィス「LIFORK南青山」。IT関連やWEB広告会社などの入居率が高い
 右●平日の昼間の様子。親子連れを始め、オフィスワーカー、犬の散歩中の人など、さまざまな世代の人が、緑に囲まれた芝生のオープンスペースを楽しんでいる



では、今後も近隣の人たちへ向けたものを含め、さまざまなイベントを企画し、エリアを盛り上げると共に地域との連携を強めていく予定だ。

さらに、その先には将来の開発があるが、今のところは「SHARE GREEN MINAMI AOYAMA」の運営期間も未定で、数年はこの形が継続されるという。

「実現できるかどうかはまだ決まっていませんが、将来的な構想としては、さらに大規模なオープンスペースを活かした施設にしていきたいと思っています。計画は現在の延長線上というわけにはいきませんが、ここで得たノウハウは活かせるので、しばらくはそれをストックしていきたいですね」

何もない広場をつくることで、見えてくるさまざまな可能性と、それを運営していくための手法。それは、今後の開発にどのように活かされていくのだろうか。従来の都市開発に見られるような容積率緩和やイベント利用など、オープンスペースを表層的に捉えるだけではなく、ここで実現した広い空や緑との共生を引き継ぎ、南青山エリアのみならず、社会にとっても、新たな価値を生じさせるものになることを期待したい。

ソニービル創業以来の理念「街に開かれた施設」を継承

Ginza Sony Park 東京都中央区銀座

取材・文：村田保子 photo：坂本政十郎（ポートレートを除く）

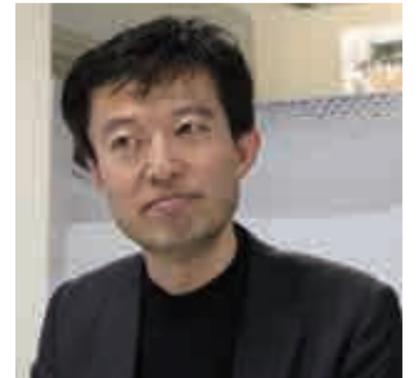
建てないという選択が面白い。銀座の庭から公園へ

1966年に誕生したソニービルが解体され、「Ginza Sony Park」として生まれ変わった。そこに現れたのはビルではなく、緑のある公園だった。銀座の数寄屋橋交差点に接する立地は、日本でも有数の地価を誇る。そこにあって建物を建てずにオープンスペースを整備した理由について、この場所を運営するソニー企業株式会社代表取締役社長兼チーフブランディングオフィサーの永野大輔さんはこう話す。

「ソニービルの建て替えにあたり、ソニーらしく、人のやらないことをやるというソニー創業以来の理念に則り、建てないという選択肢が面白いという方向性が生まれました。創業者の盛田昭夫や設計を担当した芦原義信さんに

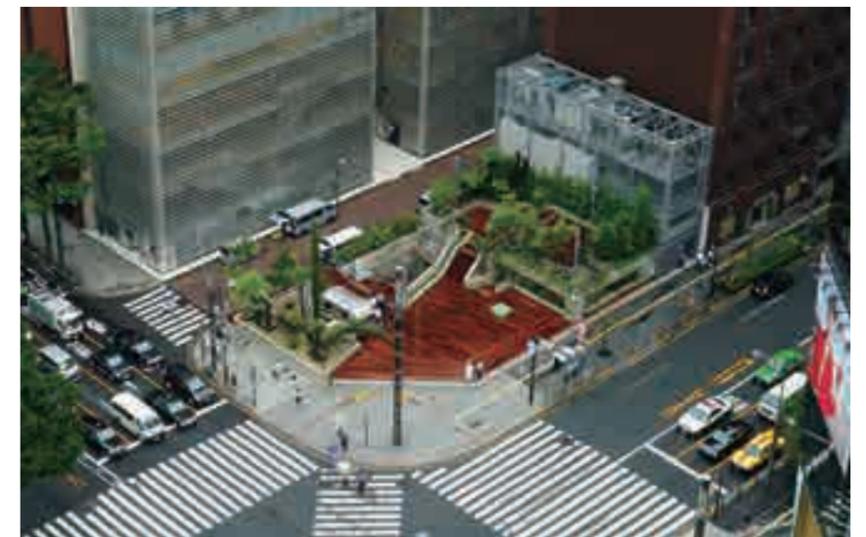
よる〈街に開かれた銀座の庭〉という旧ソニービルのコンセプトを継承しつつ、建てないのであれば、銀座の庭から銀座の公園にできるという発想が導かれました」

旧ソニービルは、ソニーのショールームとして建てられた地上8階、地下5階建ての建物だったが、数寄屋橋交差点に面した10坪ほどの角地は、オープンスペースとして空けられた。「ソニースクエア」と呼ばれたその場所では、数々のイベントや展示などが行われてきた歴史がある。今回の「Ginza Sony Park」は、このコンセプトを時代に合わせて再解釈し、一企業の敷地でありながら、銀座のランドマークであり、街に開いたオープンスペースであるという公共性を継承することも同時に考えられている。



●ソニー企業株式会社代表取締役社長兼チーフブランディングオフィサーの永野大輔さん

「今回のプロジェクトは2段階にフェーズを分けています。Ginza Sony Parkはフェーズ1で、フェーズ2は2022年の新ソニービルの完成。2020年秋の着工までの期間限定で、この場を活用していく試みです。そこには、50年間お世話になった銀座の街への感謝もありますが、銀座という街、ひいては都市にとって求められる〈場〉とはどのようなものなのか。そんなことを考える機会にしたいと思っています」



上●数寄屋橋交差点に隣接する地上のパークは、デッキの床が広がり、植栽部分には世界各国から集められたさまざまな植物が並ぶ（photo提供：Ginza Sony Park）
 左●パークの植栽に並ぶ植物は、すべて鉢植えで購入することができる



都市の中の公園を再定義した、地上1階、地下4階の立体空間

「Ginza Sony Park」は、地上から地下4階までつながる垂直立体公園でもある。いわば大幅な減築リノベーションで、地下は旧ソニービルの躯体を残したまま吹き抜けとし、地下鉄や地下駐車場とも、壁や扉などで隔てることなく一体的につながっている。その立体的な空間には、書籍やガイドブックを販売するキオスク、コンビニエンスストアをコンセプトにしたショッ

プ、コーヒースタンド、クラフトビールバーなどのテナントがぼつりぼつりと並んでいる。各ショップは「Ginza Sony Park」の理念に共感し、遊び心を分かち合えるパートナーとしてプロジェクトに参加。この場所で実験的な試みを展開している。じつは、地上の植栽部分も「日本緑化企画(株)」のショップであり、ほとんどの植物が鉢植えのスタイルで、購入も可能だ。ただし、それらのショップはさながら公園に点在する売店のような位置付



左●パークにはベンチが設けられ、来街者の休憩や待ち合わせの場所として、銀座の新しいスポットになっている
上●地下への入り口。天候によっては雨や風が吹き込むこともあるが、屋外とつながる大らかな公園らしさを大切にするため、扉などは設けていない。なお、壁面のレタリングは4月半ばまで約1カ月間開催されていたアートブックフェアのロゴ

けで、あまり目立たない。こうしたショップの配置からも、やはりこの場所の真髄はオープンスペースにあることが感じられる。「数寄屋橋交差点に隣接し、ソニー通り、外堀通り、晴海通りの3方向が開かれているこの立地だからこそ、公園として成立すると考えています。気軽に通り抜けすることもでき、地下も地下鉄や駐車場などの都市機能とつながっていることが特徴。ここで私たちは都市の中の公園を再定義し、公園であ



れば、地上にも地下にも〈余白〉が必要だと考えました。余白があるから行く度が変わって、自由に遊べて、アクティビティが生まれる。まず余白をデザインしてから、その間にショップを設ける。決してショップありきではなく、この場をより楽しめるようなショップです」
常に自身に問いかけているのは「公園らしさ、銀座らしさ、ソニーらしさとは何か」と話す永野さん。1カ月半から2カ月ごとに展開しているイベントも同様。基本的にはすべてのイベントを自社で企画・運営しており、場所貸しはしていない。持ち込まれる企画は、場所の主旨に合うかどうか厳選した上で判断し、協力して開催していくというスタンスだ。

実験の成果を活かした新ビルが銀座の街に新しいリズムを生み出す

地上と地下を公園として展開し、さまざまなイベントを仕掛けていく



左●地下1階から地下3階までは、中心が吹き抜けになり、トップライトから自然光が降り注ぐ
上●地下も扉などではなく、地下鉄のコンコースと連続したつくり

「Ginza Sony Park」には、もう一つ大きな狙いがある。それはブランドコミュニケーションの場として情報発信をしていくと共に、実験の場として、利用者がこの場所に求める要素をリサーチすることだ。来訪者には日々アンケートを取り、属性や利用目的、感想などの声を集めている。オープンから半年ほどを経た現在、多くの利用者が高い満足度を示し、ソニーらしく、遊び心がある空間だという評価を示している。

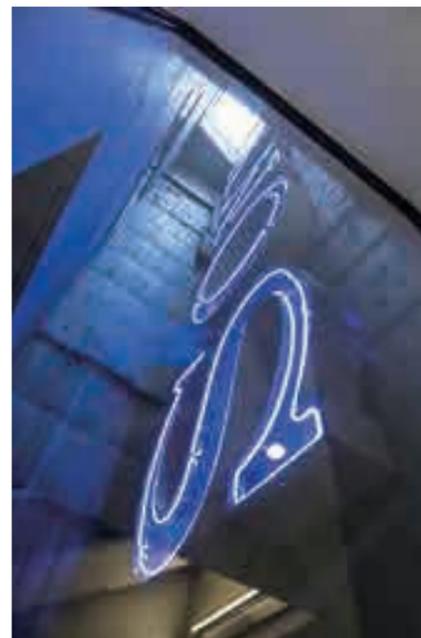
「ただし、公園として振る舞える場であることを追求し、基本的には企業のショールームのようにならない空間づくりを心がけています。それでも利用者には〈ソニーらしさ〉を感じてもらえたい。それは〈人がやらないことをやる〉というソニーのDNAに基づく新しいことへのチャレンジ精神や遊び心を、この場から感じてもらえているからだと思います。さらに待ち合わせや休憩、単に通り返ただけなど、目的をもたずに訪れ、公共空間的に利用している方が多いこともわかりました。私たちとしては、ここから街へ歩き出して銀座の魅力をもっと感じていただきたいと思っています。そしてこうした成果は、今後の新ビルのプランにもフィードバックしていくつもりです」

さらに永野さんは、まちづくりの観点から、銀座の街と新ソニービルの未来についてこう続ける。「銀座はラグジュアリーなイメージがステレオタイプになっていますが、内側から見ると、老舗もあれば新しい店もあり、リーズナブルな店や路地裏もある。ダイバーシティが地上にある街です。人の気分や人生にもハイとローがあるように、街にもアップダウンのリズムが必要だと思います。〈Ginza Sony Park〉という新たな試みは、銀座の街に新しいリズムを生じさせているのではないのでしょうか。こうした体験を得てつくられる新ソニービルは、訪れた人に新しい発見や驚きを与え、さらに新しいリズムをつくり出す場になっていくはずですよ」

2022年に竣工予定の新ソニービルは、現段階の計画では上階をUPPER PARKと位置付け、公園というコンセプトが変わらず継承されていくことが決まっている。第1フェーズの「Ginza Sony Park」で、都市の中の公園の定義が根底から考え直されたように、第2フェーズの新ソニービルも、都市にとって必要な場とは何かを問いかける場所として、ビルのあり方にさへ一石を投じる、「Ginza Sony Park」を超える場所になることを期待したい。



●地下1階には、ソニーのエンタテインメントロボット「aibo」とのコミュニケーションを体験できる空間もある



左●旧ソニービル時代のエレベーターシャフトの一つを吹き抜けに。ビルの上に付いていたネオンサインを設置している
上●ファッション・デザイナーの藤原ヒロシがディレクションした「THE CONVENI」



●トイレのサイン。旧ソニービルの外壁に使われていたルーバーの断面がモチーフになっている

再開発で生み出した「オープンスペース」を活かす仕掛け

WATERRAS (ワテラス) 東京都千代田区神田淡路町

取材・文: 村田保子 photo提供: 一般社団法人淡路エリアマネジメント (ポートレートを除く)

都市計画公園と一体的な開発。 行政と協力し、空地进行

神田淡路町の再開発をきっかけに、2013年にオープンした「WATERRAS (以下、ワテラス)」。

オフィス、店舗、住居、コミュニティ施設からなる複合型施設で、ワテラストワー(地上41階、地下3階、塔屋1階)とワテラスアネックス(地上15階、地下2階、塔屋1階)の2棟のビル、その間に開かれたワテラス広場(約1200㎡)と呼ばれるオープンスペースからなる。ワテラス広場は、千代田区が管理する淡路公園(約3000㎡)とも隣接し、ビルや商業施設、民家が密集するエリアにおいて、広大な都会のオアシスのような雰囲気だ。ワテラス広場から階段を上がり、棟間に設けられた通路を抜け

ると、御茶ノ水駅へと抜ける動線にもなっており、近隣に住む人や働く人たちが日々行き交うスペースにもなっている。ワテラス広場では、イベントが開催されていることも多く、地域外からの来訪者による賑わいも生まれている。

神田淡路町エリアの再開発は、数十年前から議論が進められていたが、その計画が大きく進んだきっかけは、1993年に淡路小学校が統廃合により移転したことだ。淡路公園と共に、千代田区の敷地を都市計画公園として再生し、周辺の敷地も含めた再開発を推進することが決まった。周辺には東京都や民間が所有する敷地などが混在。千代田区と地元の町会を中心に「淡路地域まちづくり計画推進協議会」が立



●安田不動産株式会社取締役 開発事業本部開発第一部長の須川和也さん

ち上がり、5000㎡ほどの敷地を所有していた安田不動産が事業主体として参加し、行政、民間、地域の三位一体の再開発が動き出した。

「地域の人たちは、高いビルを建てると同時に、たくさんの人が集える公共的な空間をつくり、永続的なまちの活



●ワテラストワーの1～3階には、地域のコミュニティの拠点となるコミュニティ施設として、サロン(左)、ギャラリー・ライブラリー(右上)、ホール(右下)がある。1階のサロンは、イベントがない時はまちに開かれた公園的なオープンスペースとして、地域住民の憩いの場となっている。2階のギャラリー・ライブラリーも、展示がない時は読書などを楽しむ場として自由に使える



性化を求めるという強い意向をもっていました。オープンスペースもその一つです。民間の開発で生まれる公開空地と都市計画公園を一体的につくれば、かなりの広さの空地进行を整備できますから、行政と民間が協力するかたちで計画を進めました」

そう語るの、プロジェクトを中心に担当していた安田不動産の須川和也さんだ。しかし、単に広いオープンスペースをつくれれば、それだけでまちが活性化するわけではない。そのため

安田不動産では、この場所で開発をし終わりではなく、エリアマネジメントに積極的に携わっていくという選択をした。

エリアマネジメントによる 学生を巻き込む仕掛け

安田不動産では、都市再生特別地区としての制度も活用しながら、容積率の緩和などのメリットを受けると同時に、地域貢献の一つとしてソフト面のまちづくりの提案も行った。ワテラス広場に加え、建物内にもホールやサロン、ギャラリーなどのコミュニティ施設を設け、これらの公共的な空間を運営し、地域のコミュニティの維持・活性化をサポートする組織として、一般社団法人淡路エリアマネジメントを設立。ワテラス広場を活用したイベントのプロデュースを始め、コミュニティ施設の運営も担いながら、地域住民やワーカーなど、このエリアにかかわる人々の交流の機会をつくり、コミュニティを育むことを推進している。ワテ

ラス広場だけではなく、サロンやギャラリーも地域住民が自由に使える場所として開放し、イベント時にはワテラス広場をメインに、サロンやギャラリーで関連イベントを開催するなど、相乗的な効果も生み出している。運営資金は再開発組合からの拠出金を充て、安田不動産から人材と活動拠点を提供。行政、町会、住民などが協力・連携しながら「ワテラス」の運営を継続していくスキームを整えている。

エリアマネジメントの枠組みの中には、「ワテラス学生ハウス」というユニークな取り組みがある。ワテラスアネックス最上階の14、15階に36戸の学生専用の賃貸マンションを用意し、周辺相場より3割ほど安い賃料で大学生に提供。入居する学生は、淡路エリアマネジメントの学生会員として、地域交流活動へ参加することが条件になる。月1回のミーティング、祭、防災訓練、夜警などへの参加はポイント制で管理。1年ごとの定期借家契約で、一定のポイントに満たない場



●ワテラストワーとワテラスアネックスの二つの建物で構成されたワテラス。中心にワテラス広場と区立淡路公園からなるオープンスペースがある



●安田不動産株式会社資産営業事業本部/一般社団法人淡路エリアマネジメント事務局マネージャーの堂前武さん



●ワテラス広場ではさまざまな定期イベントが開催されている。写真は、月2回開催されている「ワテラスマルシェ」(右)と、専門家の指導のもとオープンスペースの植物の世話や園芸を楽しむ「ワテラスガーデニングクラブ」(左)の様子



●NPO法人が「ワテラス広場」で定期的に行っている「移動式子ども基地@ワテラス」。「ワテラス広場」では子どもが楽しめるイベントも多数企画され、人気を集めている

合は、次年度の更新が不可となる。学生の地域活動への参加は、活性化の促進や人的資源として高い価値が期待できる。しかし、そのマネジメントは容易ではない。淡路エリアマネジメント事務局の堂前武さんは言う。

「ポイント制もあまり複雑なものにすると管理する側のオペレーションが大変になりすぎます。現実的な仕組みの中で、自主的な参加を促すために、試行錯誤を重ねてきました。丸6年が経ち、専用サイトによる参加要請の告知や申し込みができるインタフェースづくり、学生リーダーを設けるなどの体制の整備などにより、方向性が見えてきたところです。最近では、エリアマネジメントの器を使って、学生たちからやりたいことやアイデアを出しても

らうことにも取り組み、学生たちの関心も高まってきているのを感じます」

学生、企業、地域が交わり、主体的な提案が発生

現在、ワテラス広場やコミュニティ施設では産地直送の野菜や果物などを販売する「ワテラスマルシェ」、敷地内のガーデニング作業などを主とする「ワテラスガーデニングクラブ」などの定期イベントが、月に15～20回ほど開催されている。淡路エリアマネジメントが主催しているものもあれば、地域の祭りや行事、行政、企業、学校といった各種団体と連携するイベントなど、多彩なラインナップとなっている。これらのイベントは、学生会員と企業や町会を結び付ける機会であり、学生にとっても貴重な経験となっている。一方、町会や企業としても、設営などの物理的な支援だけでなく、企画の段階から学生に参加してもらうことで、活動の理念や歴史、背景にある思いなどを伝えることができる。ちなみに、地域活動に参加した学生たちは神田淡路町を、いわば「第二の故郷」のように感じ、就職してからもこのエリアに住み続けたり、一旦は別の場所に暮らしても、再び戻って来たりしてい

るといふ。将来のまちづくりの担い手としての期待も高まるころだ。

「最初は、事務局が主体的に引っ張って、この場所を盛り上げてきましたが、広場や施設があることにより、地域にかかわる多様な立場の人たちの提案が発生する状況が生まれてきています。今後も地域の人たちがこの場所を使いながら、交流を深めてコミュニティを維持し、育むことをサポートしていきたい」と須川さん。

ただ広場をつくるだけでは、場所に賑わいは生まれない。オープンスペースにどんな空間を組み合わせ、誰を引き寄せるか。さらに、集まった人々に何を投げかけるか。ワテラス広場の事例は、それらの仕組みを丁寧に組み立て、サポートしていくことにより、その場所が初めて意味をもつことを教えてくれる。



●地元の祭りやイベント開催時は、淡路エリアマネジメントの学生会員もスタッフとして参加。地域との交流を深める機会になっている

「カミソリ堤防」から、街と人をつなぐ防潮堤公園にトコトコダンダン(木津川遊歩空間) 大阪府大阪市西区

取材・文: 齋藤夕子 photo: 坂本政十 賜

ポカポカと春めいて暖かい午後、不規則な十二単の襟元のように折り重なって川へと下る「ダンダン」に腰を下ろしてみる。目の前を流れるのは、中之島の西端から大阪湾へと南下する木津川だ。日差しを受けてキラキラと反射する川面はすぐ目の前。岸辺には転落防止用の柵が張り巡らされているが、水平方向のスチールワイヤーロープは水の色に同化して、視線の妨げにはならない。周囲を見渡せば高層マンションが立ち並び、大阪市内中心部であることを思い出す。そして、都市部にありながらこれほどの開放感が得られることに、何か、贅沢な気分になる。

大阪では2000年代から「水都大阪再生事業」の一環として、水辺の回遊性向上を目指し、遊歩道整備事業に取り組んでいる。2004年に完成した道頓堀川の「とんぼりリバーウォーク」、2008年、大川左岸にリパークルーズの拠点として整備された八軒家浜、2010年にリニューアルされた中之島公園などもこうした事業の一環だ。そ

してここ、2017年4月に完成した木津川遊歩空間、愛称「トコトコダンダン」もその一つ。木津川にかかる松島橋から大渉橋までの左岸をつなぐ遊歩道約240mと、その中間に位置する、^{いたちぼりかわ}立売堀川の一部が入堀となっていた水路を埋め立てた広場からなる約4300㎡が、新たに誕生した「オープンスペース」だ。

住民参加のスキームで、柔軟なデザインを実現

しかしこの場所は、単なる広場や公園ではない。公園機能が付加された防潮堤なのだ。もともとこの場所にも高さ約5mのカミソリ堤防がそびえ、街と川は完全に分断されていた。それを今回の整備では、その高低差を旧入堀の奥行きを利用しながら平面的に解消させ、川と接する場所には、既存の護岸の上に床版を張り出させる形で遊歩道をつくった。これにより、広場から川面まで一体的につながり、いっそう開放感のある景観が創出されている。



●大阪府立江之子島文化芸術センタープラットフォーム部門チーフディレクターの忽那裕樹さん

実際には船の発着はできないが、たとえば舳の浦の階段状になった船着き場「大雁木」のような雰囲気もある。

このため、川の潮位が上がれば、水は柵を超えて浸水してくることが前提となっている。その柵にしてもワイヤーロープで、堅牢性が高いとは思えない。そもそも防災土木事業に類する堤防工事でありながら、全体的に、いい意味での「緩さ」を感じる。

「普通なら、川沿いの柵を水平にするなんてご法度です。ハシゴのように登って、川に落ちる危険性がある。だからここではワイヤーにしているんです。足を掛けるとロープがたわむから、登れないでしょう？ それに川までの見晴らしの妨げにもならず、デザイン的にも美しい」

大阪府立江之子島文化芸術センター(通称:enoco)でプラットフォーム部門チーフディレクターを務める^{くつなひろ}忽那裕樹さんはそう言って、ニヤリと笑う。だが、通常の公共事業ではそんな「意図」も、説明さえできずに却下されて



●木津川に面した階段状の広場「トコトコダンダン」



上●広場から川面までが一体的につながり、伸びやかな景観がつけられている

右●犬の散歩や子どもの遊び場として、近隣住民に日常的に利用されている



しまっだろう。

こうした整備を実現した背景には、徹底した住民参加の仕組みがある。それを可能にしているのが、大阪府立江之子島文化芸術センターの存在であり、ここで展開するプラットフォーム形成支援事業である。さらには、チーフディレクターの忽那さんのパーソナリティも関係しているに違いない。

大阪府の府民文化部文化課が所管する大阪府立江之子島文化芸術センターは、「アートやデザインなどの創造力で、大阪という都市を元気にすること」を目指し、2012年4月に開館した。新しい施設だが、その建物は1936年に建設された近代建築をリノベーション活用している。施設自体は、ギャラリーや多目的ルーム、スタジオなどのレンタルルームを中心に、カフェやライブラリーが併設され、誰もが利用できる地域の拠点となっているが、この他、自主事業として「ネットワーク」「教育」「プラットフォーム」を掲げ、文化・芸術をコンセプトとしながらさまざまな活動を展開している。

「enocoは、いわば〈よろず相談窓口〉です」と、忽那さんは言う。

「何らかの課題を抱える行政や府民の

相談を受けて、必要な人材や組織をつないだり、専門家に協力を要請したり、企画事業をしたりしながら、街を魅力的に、面白くしていくためのお手伝いをするのがこのセンターの仕事です」

忽那さん自身もランドスケープアーキテクトであり、ランドスケープデザインを中心にまちづくりにも取り組む株式会社E-DESIGNの代表取締役だ。enocoでは専門家としてアドバイザー役も担っている。

今回の木津川遊歩空間整備事業は、事業主である大阪府の都市整備部西大阪治水事業所と府民文化部文化課、さらにenocoがタッグを組み、当初より、市民を巻き込む形のプラットフォームを構築したことが大きな特徴だ。



上●旧入堀の上流部側の入り口。以前は「カミソリ堤防」が築かれていた

右●護岸整備の変遷を示す年号プレートが、各所にさりげなく掲示されている

最初に行ったのは、地域の人々にとってどのような親水空間が望まれているのか、どのような場所であれば利用を促進できるのか、地域住民によるワークショップを繰り返し開催し、そこで出た意見をもとに、設計競技における要項を決定することだった。

さらに通常は、こうした公共事業の設計競技には一定の参加資格が付与され、公共事業での実績がない若手建築家やランドスケープアーキテクトは参加さえできないケースが多い。しかし今回はアイデアがあれば誰でも応募できるアイデアデザインコンペを実施した。サポート体制も完全に整え、1次審査を通過した応募者は河川設計のコンサルタント業者及びエンジニア・アーキテクトのサポートを受けることができ、そのサポート内容を2次審査資料に反映できるという仕組みも用意されていた。この結果、全国から40件の応募を得て、最優秀賞に、建築家・ランドスケープアーキテクトの岩瀬諒子氏による「だんだんばたけでハマベをつくる一立売堀のマーケットプレイス」が選出された。岩瀬氏は、このコンペを機に独立した若手建築家だ。

「岩瀬さんのプランは、この地域の歴史性や気候・風土を踏まえると共に、



住民参加で植栽を行い、管理・運営を行っていくなど、今後、地域の人々の交流拠点となる可能性もありました。ただ彼女自身にとっても、ほとんど初めての大きな仕事ですから、こちらもしっかりサポート体制を築きました。そもそも土木事業に建築家が参加すること自体あまりないので、施工事業者とも調整を繰り返し、なんとかアイデアを実現する方法を探したり。岩瀬さんも最後まで何度も現場に通って、熱心に取り組んでくれました」と忽那さんは語る。

このことは、施工事業者にとっても、住民の意向や設計者のアイデアを生かした施工を行うことがほとんど初めての試みだったということだ。その「初めて」という意識が、行政を含む関係者全員のチャレンジ精神を育み、一体感を生じさせ、「良いものをつくろう！つくりたい！」という熱意につながったのではないだろうか。

街に開かれた防潮堤として

また事業が進む中では、完成後の管理・運営を地域で主体的に担えるよう、近隣の町会や地域で活動をしている住民活動グループなどへのヒアリングを行うと共に、ワークショップも随時開



●市民有志で構成される「トコトコダングンの会」によって植栽の手入れが行われている



左●禁止事項を示すサインも可愛いデザイン
上●スチールワイヤーロープが水平に張られた柵は川面と同化し、視線の妨げにはならない

催、さらなる事業の周知と住民参加の意識醸成も図られた。そして、2016年1月には住民有志による「(仮称)木津川遊歩空間を楽しむ会」の準備会が発足する。同年3月に一部共用が開始すると楽しむ会による花壇の植栽や清掃活動などもスタート。また同年7月にはイベントとして「あおぞらヨガ」を開催した。当日は飛び入り参加も含め、大人24名、子ども6名の参加を得たという。そして2017年4月のグランドオープンに際し、公募で決まった愛称を使った「トコトコダングンの会」(事務局・NPO法人トイボックス)に改称。現在は、月1回の花壇の手入れや清掃活動の他、季節のイベントを年2~3回程度、不定期に行っている。「去年の6月には(水辺でピクニック)というイベントを企画して、ストリートダンスチームに踊ってもらったりしましたが、基本的には、来た人がそれぞれ、好きにこの場所を楽しむという、緩い感じのもの。それでも、結構たくさんの方が集まりました」

忽那さんはそう言って「ただ、ここでは変に賑やかなイベントをするよりも、この雰囲気を楽しんで、のんびり

してもらう方が似合っているのかもしれない」とも言葉を継いだ。

平日の午後、トコトコダングンにはのどかな静けさが漂っている。時折、犬を散歩させる人が訪れ、「ダングン」に腰掛けてひと時を過ごしたり、顔見知りなのだろうか、飼い主どうしが立ち話をしたりしながら、この場所に佇むこと自体を楽しんでいるように見える。それはおそらく、空間のデザインに起因するものであると共に、そのデザインを完成させるプロセスに携わった人々の思いが、きちんと具現化されたからこそ生じる心地よさが、そうさせるのだ。

カミソリ堤防だった当時には考えられなかったことだが、旧入堀の上流方向、街に接するトコトコダングン入り口正面には、新たに、テイクアウトも可能な飲食店がオープンしたそうだ。トコトコダングンへの散歩帰りに立ち寄り、あるいは買ったものを持って行って広場で食べるというニーズを見込んでのことだろう。トコトコダングンというオープンスペースと人と街とのかかわりは、今後ますます、深化していくに違いない。

トランジットモールが街に賑わいをつくる

姫路駅北駅前広場及び大手前通り 兵庫県姫路市

取材・文：齋藤夕子 photo：坂本政十賜

2015年3月に天守閣の保存修理工事を完了した国宝姫路城。白鷺城の異名を持つ白亜の名城は、1993年に日本で初めて、奈良の法隆寺と共に世界文化遺産に指定された。保存修理が完了した年には国内外から年間約290万人の観光客を集め、その数は年々落ち着いてきているが、概ね年間200万人近い観光客が訪れている。そして、その玄関口となる姫路駅では、1987年の都市計画決定を受け1989年よりスタートした姫路駅周辺地区整備事業（愛称：キャストィ21）が進行中だ。このうち鉄道高架化工事が2011年に完了、これに続く駅周辺整備において、北駅前広場から姫路城へと一直線に伸びる大手前通りの整備が2014年9月に完了した。

市民からの「交通広場」に対する提案

この整備が目目されるのは、北駅前広場と、そこからつながる大手前通り約160mをトランジットモール化すると共に歩道を拡幅し、一帯を歩行者のための空間としたことにある。トランジットモールとは公共交通機関だけが優先的に進入できる歩車共存道路で、日本での本格的なトランジットモール化は初めてだ。これに伴い、駅の西側にバスターミナルやタクシー乗降場をまとめ、駅正面から東側には、地下街の再整備と連動したサンクンガーデン「キャッスルガーデン」を、地上には芝生広場として「キャッスルガーデン北広場」が設けられた。また、駅ビル（ピ

オレ）2階部分からつながる連絡デッキの、姫路城の真正面に眺望デッキ「キャッスルビュー」が設置され、姫路市を象徴する都市景観を満喫できる視点場も誕生している。

だが、当初からトランジットモール化が構想されていたわけではない。2007年11月、姫路市が提案した駅前広場の素案は、従来からのバス・タクシーへの乗降や自家用車でのアクセスを優先した、いわゆる交通結節機能を重視したレイアウトだった。

「1987年に都市計画決定した駅前広場の案では、駅ビルが中央コンコースから姫路城への視界を遮っており、これを解消し、北駅前広場の形状を変える都市計画変更を行うために、駅前広場の参考図とパース図を提示しました。するとこの参考図を見た市民、姫路市商店街連合会やまちづくり協議会などから、駅と駅前商店街が車道で分断されている点について異議が唱えられました」

経緯をこう説明するのは、姫路市都市拠点整備本部姫路駅周辺整備室整備担当主幹の梅田均さんだ。同整備室係長の小幡晃義さんも「姫路駅前には網の目状にアーケード商店街が広がっており、従来通り車道を渡らずに商店街に入ってもらい、回遊性を高めたいという意向があったのでは」と推察する。

そこで姫路市では参考図をたたき台として、その是非を市民に広く問いながら、レイアウトを決めていくことを決断する。2008年11月には、行政、



●左から小幡晃義さん、梅田均さん、神光祐典さん、東郷剛宗さん

交通事業者、商店街連合会、市民団体やNPO法人などで構成された「姫路駅北駅前広場整備推進会議」を発足。同時に、同会議のメンバーで、姫路市を拠点に活動するまちづくりNPO法人「スローソサエティ協会」が、新たなまちづくりの手法として「シャレットワークショップ」を展開する「NPOまちづくりデザインサポート」に協力を要請した。同NPO法人の理事長で、明治大学理工学部建設学科教授の小林正美氏を中心に、都市デザインや建築、ランドスケープデザインに関する専門家が駅前広場整備に加わることとなった。

「荷馬車」を意味する「シャレット」を冠するワークショップは、欧米のまちづくりでは多く取り入れられている手法で、都市や建築に対し専門性をもつ人々が短期間に集中して（いわば、馬車馬のように働いて）街の課題を探り、具体的な解決方法を考えるというものだ。そこでNPOまちづくりデザインサポートでは今回、全国の大学から専

門知識をもつ大学院生を集め、2008年11月と、2009年1月の2回、各3日間で集中的にワークショップを開催、市民からの意見を取り入れつつ、専門的な立場から検討したプランを作成した。

市民、行政、専門家の徹底した連携

こうしてスタートした新たな駅前広場のプランづくりだが、この会議だけで決定したわけではない。市民フォーラムや市民ワークショップ、公開専門家ワークショップ、専門家会議、連続セミナーなどが随時開催され、市民、行政、専門家それぞれが「姫路の顔」としてふさわしい駅前あり方について考え、議論する場が多数設けられた。そして、そこで出た意見については、専門家や行政が集約、検討し、さらに解決案を提示するという方法で最終的なプランがつくりあげられていった。

一方、鉄道高架化に伴う関連道路事

業の進展により、南北に行き来する道路が従来4本10車線から10本28車線に増加、クルマでの交通利便性が向上したことに伴い、駅前の通過交通の減少が見込まれていた。このことから、推進会議で大手前通りのトランジットモール化が提起された。そこで社会実験として、駅前広場などを整備するために一般車の進入を制限。この結果、とくに問題が生じることはなかったため、トランジットモールを実現することができた。

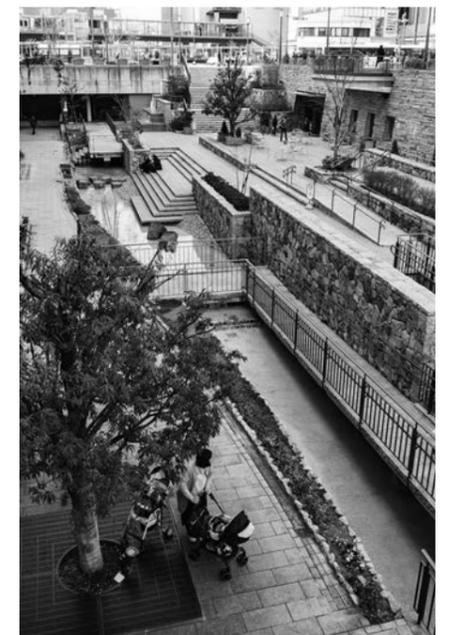
また、整備に並行して完成後のオープンスペースの活用方法や管理・運営の手法も話し合われた。2011年10月にはエリアマネジメントの担い手を想定し「姫路駅前広場活用連絡会」が発足、2012年にはエリアマネジメント組織「一般社団法人ひとネットワークひめじ」が設立する。グランドオープンに先駆け、2013年4月にキャッスルガーデン及び地下中央通路の整備が

完了すると、これらのオープンスペースをどのように活用し、その管理・運営手法を探る社会実験として「チャレンジ駅前おもてなし」が開催された。

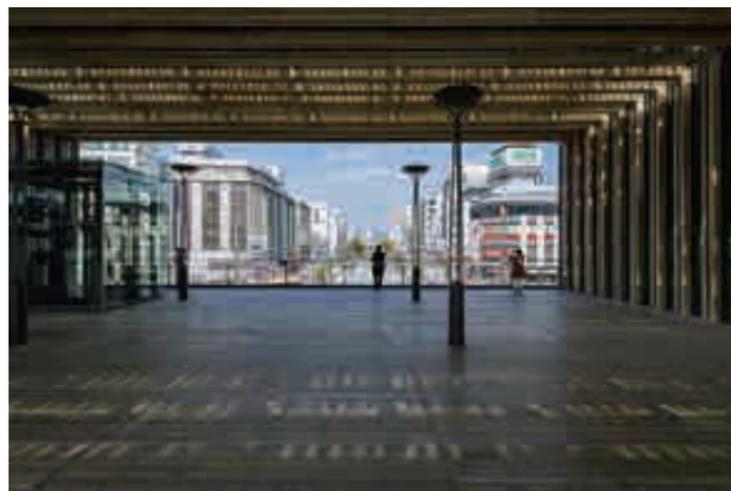
当時の状況について、姫路市産業局商工労働部産業振興課中心市街地活性化推進室の神光祐典さんは以下のように語る。

「2013年9月から2015年3月末まで開催した社会実験は、中央地下通路とキャッスルガーデンの一部をマルシェやライブ、PR活動などに使ってもらおうというものです。スタートした2013年度は43件、2014年度は160件の利用がありました」

この時はまだ、地上のキャッスルガーデン北広場は整備中だったが、現在はこの北広場、キャッスルガーデン、中央地下通路を「姫路駅北にぎわい交流広場」と総称し、イベントなどに使用できる「活用空間」と位置付けられている。なお使用料は、販売行為のな



●まだ空気の冷たい3月初旬でありながら、開放感のある心地よさを求めて多くの人が集う「キャッスルガーデン」。水路は子どもたちの関心の的で、夏になれば、水遊びをする子どもの姿も。日が落ちると、石段の下に配された間接照明が灯り、より奥行きのある雰囲気を感じられる



左●正面に姫路城を望む眺望デッキ「キャッスルビュー」。パースペクティブな都市景観を満喫できる
上●シンプルながらシックな佇まいを見せるJR姫路駅。2階部分が「キャッスルビュー」

いイベントの場合で30円/㎡。事前に申請書などの提出と使用許可が必要だが、使用目的に強い規制はない。そうした使い勝手の良さもあり、利用件数も年々増加し、2018年度は379件、使用料約544万円という実績を得ている。

にぎわい交流広場の運営業務を担う一般社団法人ひとネットワークひめじ事務局長の東郷剛宗さんは「使用料が比較的安いので、個人のライブ、パフォーマンスなどでの利用も多く、定期的なイベントも開催されています。とくに中央地下通路は屋根のある半屋外なのでマルシェなどの物販によく利用されています」と教えてくれる。

「ただ、利用実績というイベント件数や使用料が指標になりますが、この場所の価値は、とくに目的を持たずに

訪れ、友だちとおしゃべりしたり、子どもを遊ばせたり、何気なく使ってもらえていることにこそ、表れているような気がしています」とも東郷さんは語る。

場所が人を呼び、人が魅力をつくる

ウィークデイのこの日、とくにイベントは開催されていなかったが、市内の高校で卒業式があったようで、午後になると、胸にコサージュをつけた制服姿の女の子たちが集まってきた。卒業記念に、SNS上での「ばえる」写真を撮りに来たらしい。キャッスルガーデンは、姫路城をモチーフにしたデザインで構成されており、かつてこの近くを流れていた城の外堀をイメージした水路を底辺に、城の城壁を思わせる錆御影石による自然石舗装のフロアが

階段状につながり、所々に、割石を野面積みした石垣が配置されている。あらかじめ設置されたベンチはないが、このことが逆に、階段や石垣のどこにでも腰を下ろせる雰囲気をつくっている。実際、女の子たちは水辺の階段や石垣に座り、よりフォトジェニックに写るよう、さまざまに工夫を凝らしていた。

姫路駅前から、大手前通りの広くとられた歩道と、これに続く芝生の広場、その階下に緩やかな階段でつながる、水景を伴いゆったりと広がるキャッスルガーデンからなるオープンスペース。ここには、訪れる人それぞれが、自分なりの振る舞いでこの場所を使い、楽しんで良いといった、自由な空気が漂っている。それは竣工までのプロセスに、多くの人々が携わり、この場所を「自分ごと」として捉えながら、来訪者を迎える「姫路の顔」としてのデザインと、その活用方法までを検討し、運営しているからこそ生じる空気感なのだろう。ここは単に開かれただけの場所ではない。この場所を心地よく感じる人々が自ずと集い、街に賑わいと魅力的な雰囲気をつくりだす「オープンスペース」だ。



左●「キャッスルビュー」から大手前通りを望む。駅前からゆったりとした歩行者空間となっていることがわかる。この左手にバスロータリーとタクシー乗降場がまとめられている
上●大手前通りの広々とした歩道と連動する芝生の広場「キャッスルガーデン北広場」



図と地、 価値の反転 建築とオープンスペース

芦原義信氏は、1979年に刊行した『街並みの美学』において、「われわれ日本人は、ついに内外空間領域の同視が現在までできないまま、都市景観としてきわめて貧弱な街並みをつくってきた」と指摘し、建築の外部空間の重要性を訴えた。以来40年、日本の街並みと建築の関係は変わってきただろうか。近年、新設される大小の建築物、あるいは大規模都市開発の中には、建築と街をつなぐ開かれた場として、オープンスペースが積極的に設けられているように見える。こうしたオープンスペースは、良好な都市景観を築き、都市と建築を魅力的にし、さらにそこに集う人々に心地よさや喜びを与えるものになっているだろうか。識者による考察を得ながら日本のオープンスペースの歴史や制度をひもとき、オープンスペースと建築のこれからについて考える。

取材・文 杉山衛

●姫路駅北駅前広場「キャッスルガーデン」(photo:坂本政十郎)

東京など人口が密集する都市を中心として、高度成長期に建てられ老朽化したビルの建て替えを始め、それを含み街区、あるいは本誌124号(2018年12月発行)特集「生まれ変わる街」で取り上げた渋谷、新宿、池袋のように、「まち」まるごとの再開発が、現在、数多く進められている。

ここで注目されるのは、オープンスペースの扱いだ。

たとえば渋谷駅周辺の大規模リニューアールにおいて、デザイン会議の座長として計画の全体を主導する建築家・内藤廣さんは、複数に及ぶ街区のそれぞれのデザインを「デザイナーアーキテクト」と呼ばれる建築家に任せている。その際、各街区には地下と地上を結ぶ縦の動線としての「アーバンコア」と、地上をさまざまなかたちでつなぐ、横の動線としての歩道である「スカイウェイ」の設置を条件づけている。このおかげで今渋谷のまちには、地上から地下2～3階までが見渡せるような大きな「穴ボコ」や、JR山手線の線路を越えたり、地下鉄銀座線の線路屋根の上を歩くデッキなど、これまでにない回遊性をもった新しい都市景観ができてきた。

これらはすべてオープンスペースであり、言い方を換えれば、渋谷駅周辺のリニューアル計画はオープンスペースをキーコンセプトとしたまちづくりであると言える。この視点から見ると、西口広場の展開を目指す新宿も、公園やストリートを活用しながらまち全体の劇場化を目指す池袋も、やはりオープンスペースを重

視したまちづくりを進めていることがわかる。

ところで、都市をゲシュタルト(心理学の用語として「全体のまとまりの構造」)として捉え、図と地の構図で都市を見る手法がある。この構図では、構築物としての建築は、いわば「地」から立ち上がる「図」であり、それ以外は「地」になる。しかし近年、建築物を取り巻くオープンスペースにも「図」としての役割が期待されているのではないだろうか。であれば、「図と地の反転」と捉え直すこともできそうだ。つまり、オープンスペースを都市の「図」として積極的に評価しようというわけだ。

オープンスペースの基礎知識

都市デザイナーであり、東京大学大学院新領域創成学科研究科教授の出口敦さんは、論文「公開空地等の公共空間ストック形成の潮流と変遷」(『都市計画』vol.65 No.5、日本都市計画学会、2015所収)で、都市計画法で定められている「公共施設」や「公共空地」を含めた「公共空間(パブリックスペース)」を、「土地の公有、私有に関わらず、不特定の人に公開されており、人々が入り出し、移動でき、佇むことができ営利を主目的としない空間」と定義している。この定義は、一般的には、個人に属さない空間、とくに日本では、行政が所有する公有地と考えられている「公共空間」の概念を拡大しているという点で、広く「オープンスペース」と言い換えることができそうだ。



●東京大学大学院新領域創成学科研究科教授の出口敦さん

そのうえで出口さんの論文では、日本の伝統的なオープンスペースの多くは、寺社仏閣への参道として整備された道(ストリート)に市が立つなどのアクティビティが生まれ、広域のネットワークが形成されるきっかけとなったとその発生を説明している。ここからは、子どもたちの遊び場、今でいう公園や広場は、もっぱらお寺や神社の境内であったという話も思い起こされる。降って明治期には、こうした寺社地などを接収した公園(営造物公園＝都市公園)が設置されるようになり、1887(明治20)年までには、全国に約80カ所の公園が整備されている。

さらに降って戦後には、新・道路法(1952年)、道路交通法(1960年)、都市公園法(1956年)、新・河川法(1964年)と、オープンスペースに関連する法制度が整備され、時間によって自動車の乗り入れを規制する「歩行者道路(後の歩行者天国)」や、都市の河川の暗渠化による「遊歩道」などが登場する。それと同時に、ある公園では花見や飲食が禁止されたり、原則として自由な商業活動が制限されるな

ど、規制的な面も強化されるようになった。とくに1960年代に入ると、新宿西口広場を舞台とした若者たちの反戦フォーク集会在り排除されるなど、高度成長期の日本は、オープンスペースの使い方に大きな制限がかけられる時代でもあったということができる。

都市に人口が集中したこの高度成長期には、オープンスペースに関する三つの法制度が相次いで整備されている。一つめは、新都市計画法(1968年)と改正建築基準法(1950年)により、一般の建築規則にとらわれず、オープンスペースの配置や規模などに応じて容積率の制限を緩和する地区を定める特定街区制度(1961年)の創設。二つめは、都市再開発法に基づいて、とくに密集市街地を対象として細分化された敷地や建物を統合し、そこにオープンスペースを確保すれば容積率の制限が緩和される高度利用地区制度(1969年)の創設。そして三つめは、個々の建築計画についても、敷地内にオープンスペースを確保すれば、その配置や面積に応じて容積率の制限や斜線制限が緩和される総合設計制度(1970年)の創設である。こうした制度は、オープンスペースを効果的に取り込むことで、市街地の環境を向上させる手法として、これまでの日本の都市開発の基本的な骨格ともなってきた。

いずれも敷地や街区に、公共に開かれたオープンスペースなど、都市にとって優良な環境を提供することで、容積率アップなどの、いわゆる「ボーナス(特典)」がもらえるという仕組みだ。こうした制度は、直接には1960年代

初頭にニューヨークやシカゴで実施された「インセンティブゾーニング制度」をモデルとしていると考えられる。だが、建築家で明治大学副学長、並びに理工学部建築学科教授の小林正美さんは「こうしたオープンスペースのあり方は、アメリカではすでに80年代には問題視され始めていました」と指摘する。

「インセンティブゾーニング制度は、ル・コルビュジエの『輝く都市』におけるモダニズムの理念に端を発し、これをアメリカで制度化したものです。しかし、制度によってシステムティックに誕生していった単なる開放型のオープンスペースは、結局ほとんど使われず、都市の〈図〉ではなく〈地〉にしかありませんでした。機能的、合理的であるといった造形理念をもつモダニズムは近代化の中でシステムに乗りやすい。このため制度になった時、本来はそこにあったはずの〈理念〉が失われてしまったのではないのでしょうか。僕がハーバード大学に留学した80年代には、アメリカでも、僕の恩師でもある芦原義信さんの『街並みの美学』やレオン・クリエの都市論などを参照しながら、いわゆる〈モダニズム的〉な手法への反省によるニューアーバニズムの動きが起きていました。そこでは、単に建物をセットバックして生まれる開放型のオープンスペースではなく、ストリートエッジ(建物の壁面線)を回復し、街路や広場を〈図〉として扱おうという視点の転換がすでに行われていました」

現在の日本の都市の骨格は、戦後の



●明治大学理工学部建築学科教授の小林正美さん

戦災復興以降、高度経済成長期にかけてつくられてきた。つまり1950年代に世界的な潮流として隆盛したモダニズムの影響を受けているといえるだろう。しかし、上記小林さんの指摘にもあるように、モダニズムの「理念」が反映されてきたかどうかは判断が難しい。しかも、そもそもモダニズムがどのような「理念」をもつのか、あるいは、建築様式として確立しているのかは、実は、今なおさまざまに議論が分かるところだ。

だが、そうしたことを踏まえたうえで、モダニズムと都市と建築の関係について、時代の趨勢を区分して把握するのが、プロジェクト・プランナーの真壁智治さんだ。

都市と建築とオープンスペース

芦原義信を主任教授として1965年に創設された武蔵野美術大学建築学科の第2期生として学んだ真壁さんは、戦後日本の都市の動向を四つの時期に分けて説明する。

「当時からモニュメンタルな建築よりも〈都市〉に興味がありましたから、



●プロジェクト・プランナーの真壁智治さん

芦原さんが創設されたムサビの建築学科に行くしかない、と考えました。つまり僕にとっての認識は、建築デザインの内に都市デザインの視点がしっかり組み込まれていたのが第1期、1955年ころから始まる〈モダニズム隆盛期〉がそれです。芦原さんはその体現者でもあったのです」

真壁さんは、日本の建築デザインが都市へのまなざしを開き始めたのがこの第1期だという。たとえば、建物を連絡通路で結んだり、まちと接するファサードのデザインを重視した坂倉準三の渋谷駅周辺の開発計画などがその好例だという。このプロジェクトは1950年代半ばに始まっているが、坂倉準三は、1930年代の初めにはパリでコルビュジエに師事し、後には『輝く都市』を訳しているバリバリのモダニストだ。

またモダニズムには「man aid city」、すなわち「人間のための都市」という理念が根底にあり、そのために多方面から多くの研究が積み重ねられてきたとも指摘する。1889年の、イタリアのカミロ・ジッテによる『広場

の造形』を始め、ケヴィン・リンチの『都市のイメージ』(1960年)やゴードン・カレンの『都市の景観』(1961年)などの都市論はもちろんのこと、人間の心理や文化へ目を向けたエドワード・T・ホールの『かくれた次元』(1966年)や、フィリップ・シールやローレンス・ハルプリンなどのノーテーション(空間記述)研究、ジェームス・ギブソンがアフォーダンスの概念を提唱し始めるのもこの時期だ。そのどれもがオープンスペースへ関心を向けるものだった。

1956年には、建築や都市デザインを主な専門とするハーバード大学デザイン大学院(GSD)で「アーバンデザイン会議」が開催され、「アーバンデザイン」という新しい領域が誕生している。

一方この時期の日本では、伊藤ていじや磯崎新などが中心となった『日本の都市空間』(1968年)において、機能によって区画を硬直的に切り分けるモダニズムの都市計画に代えて、空間的な「かいわい(界限)」や時間的な「ひもろぎ(神籬)」といった、日本的な概念を援用した独自の都市形成の原理が提示されている。真壁さんが示した第1期「モダニズム隆盛期」は、いつ、どこでも成立する国際的な都市様式としてのモダニズム期から、その都市が置かれる地域や、そこに根付いている人や文化にそのまなざしを上げようとした時期までを含むものを指す。世界の街並みを訪ね歩いて分析した芦原義信の『街並みの美学』(1979年)や、地形がもつ文化との連

動性に着目した槇文彦の『見えがくれする都市』(1980年)は、すでにこうした次なるモダン、あるいは異なるモダンを志向する、そのとば口に位置する見解だということができるかもしれない。

次に真壁さんが区分する第2期は「ポストモダン期」、すなわち「都市デザインと建築デザインが決定的に乖離し、建築デザインのなかでだけの論理の闘争が展開され、それによって〈建築〉の解体が始まった時期」と特徴づけられている。

「意匠や様式といったさまざまな歴史的デザインを、〈今〉という地点から見ると等価なものだとして、自由自在に引用できると考えたのがポストモダンです。ですから、ポストモダン建築にオープンスペースがつくられたとしても、それは古代ギリシアの都市国家にあった広場(アゴラ)や、イタリアの広場(ピアッツァ)の引用でしかありません。つまり建築の中での建築言語の引用でしかなく、まちにつながるオープンスペースではありませんでした」と真壁さん。この「ポストモダン期」の到来により、1975年ころからバブル期にかけて、建築家はまちと地続きになった「場」としてのオープンスペースを考えなくなり、また都市と建築の関係を語る研究も蓄積されなくなってしまったという。

新しいオープンスペースの考え方

ポストモダンを謳歌した第2期はバブル期の崩壊と共にその終わりを迎え、2008年のリーマン・ショッ

クを経由する低成長時代とグローバル化する経済の中で、建築デザインと都市デザインの関係も新しい局面を迎えた、と真壁さんは言う。その「第3期」のキーワードは「まちづくり」だ。それは、それまでの都市計画とは異なり、より身近なまちの解決をはかるデザイン実践を目指した。

1990年代に入ると地方都市を中心に、大手のデベロッパーやゼネコン、コンサルティングに頼らない、市民活動としての「まちづくり」が活性化する。その先駆的な例としては、1985年から地域の人たちの主導で始まった、長野県小布施町の「町並み修景事業」が挙げられるだろう。地方における人口の減少や、その対策の一環としての観光の振興などを背景としたこの事業は、その後修景からまちづくりへと発展し、人口を微減にとどめると共に、今では年間120万人にも及ぶ観光客を集める、人気のあるまちへと育っている。

真壁さんが、この第3期の指標とする一冊の本がある。2013年に刊行された槇文彦の『漂うモダニズム』だ。真壁さんは、本書での「モダニズムとは何か」という槇の問いかけを受け、編著書として『応答漂うモダニズム』(2015年)を著しているが、この応答本の中で槇はさらに、若手建築家たちの活動の一端から、建築家の役割の変化を「軍隊」と「民兵」という比喻を使って読み解いた。「つまり槇さんは、20世紀から21世紀にかけて世界中の都市をつくってきた巨大な建築の力を〈軍隊〉と表現し、それに対して

草の根的なまちづくりが〈民兵〉として立ち上がってきた、というわけです。そこに変貌する建築家の生態を見ている。小さなモノやコトへの気付きから、〈まちづくり〉が一度乖離してしまった建築デザインと都市デザインをつないでいく。それが第3期なんですね」。それゆえ真壁さんは、この第3期を「漂うモダニズム期」と命名する。

そして現在の私たちは第4期、「オルタナティブモダン期」を迎えているのだという。なお「オルタナティブモダン(もう一つのモダン)」とは、『応答漂うモダニズム』の中で、建築史家・建築評論家の五十嵐太郎が応答する形で書いた論考「オルタナティブ・モダン-近代の底が抜けた後に」から、真壁さんが引用した言葉だ。

そして、この第4期の大きな特徴は、一つの「建築」が一つの「施設」に収まらない多様性が求められ始めたことにある。「〇〇のための建築」ではなく、むしろ開かれた「場」(非施設化)としての建築が求められ、そこにつくられるオープンスペースも、広場や公園というよりは、あらかじめ決められた機能をもたない、都市の「余白」というようなものになりつつある。同時に大手の組織設計が進める再開発には、建物の中にプロムナードを通すような大胆なオープンスペース化も行われ、いまではそうした街区づくりが常套化した感さえある。

「建築だけでは現代の多様化する問題を解決できなくなり、2010年ころからスタートする第4期には、都市デザイン的に見える建築が一挙に増えてき

ました。これからは、より都市デザインの視点から建築デザインが発想される時代になるでしょう。つまりそこには、第1期とは反転の構図があります。槇さんが『漂うモダニズム』のその後として〈Another Utopia〉(『新建築』2015年9月号所収)を書かれ、市民参加型のオープンスペースにこれからの都市空間や都市生活の豊かな可能性を託されたことは象徴的です」と真壁さんは言う。

真壁さんが区分する第4期の建築としては、大きな屋根に覆われた建築群の中心に土間をイメージしたオープンスペースが広がる「アオーレ長岡」(隈研吾、2012年)や、主要な施設を地下に埋没させ、地上にはオープンスペースが広く確保された「杉並区大宮前体育館」(青木淳、2014年)などが挙げられるが、最近では、東急池上線の「戸越銀座駅舎」(アトリエユニゾン、2016年)に共感したという。現代的な工法で木材を駆使したその駅舎は、駅が単に交通インフラの機能を満たす空間だけではなく、「吹きさらし」のオープンスペースとなることで、建築とまちと人々を媒介する「場」となっていると指摘し、建築の媒介性に注目している。

ここには、かつてのモダニズムの都市計画に見られたような禁欲的な原則主義ではなく、市民が気軽に参加できるような草の根的なおおらかさとユーモアがある。それが、第3期の「まちづくり」を経由した、「オルタナティブモダン」の大きな特徴であり、大きな可能性だと、真壁さんは指摘する。

マネジメントで変わる オープンスペース

「近年になって、行政から公民連携、さらに一般市民の参加や民間主導へと、まちづくりのプレイヤーが大きく変わってきました。(特別措置法)や(国家戦略特区)、あるいは(しゃれ街条例(東京のしゃれた街づくり推進条例))のような自治体の裁量による条例など、オープンスペースを民間で管理できる法制度も、少しずつですが、整備されています。(社会実験)という名目でさまざまな試行錯誤もやりやすくなり、多くの若い人たちがオープンスペースの活用に興味を持ち始めています」

都市やまちづくりに市民が参加し始めた状況を、冒頭の論文の著者である出口敦さんもこのように分析している。出口さん自身も、2004年には福岡市天神地区における道路や駐車場・駐輪場施設の新たな利用法にかかわる大規模な社会実験の実行委員長を務め、これを契機として2006年には、既成市街地型都心部でわが国初のエリアマネジメント協議会の設立とその運営に、中心的な役割を果たしてきた。エリアマネジメントは、行政からも、「地域の環境を向上させるための民間主体の地域経営」というように定義され、行政が担当するインフラ整備とは位相が異なる「運用」や「活用」に、その重点が置かれているのが特徴だ。現在では全国各地にエリアマネジメント協議会が設立され、相互のネットワークもつくられ始めている。

オープンスペースの運用や活用とい

う点では、冒頭に紹介した特定街区や総合設計のあり方も変わってきている。かつては敷地の中にオープンスペースをつくれれば、その形状や面積が数値的に容積率の割り増しに「換算」された。しかし21世紀に入って都市再開発法や都市再生特別措置法に「特区制度」が整備されてくると、容積率の割り増しが単純な換算ではなく、その評価に「公共貢献」という軸が導入されるようになったという。

「防災や、イノベーションを起こす仕組み、駅などの公共施設への接合部分へのサポートなど(公共貢献)の評価にはいくつかの条件があり、その重要な一つがマネジメントです。担当行政による定性的な判断によることから、その基準は明確に示され難い点がありますが、これによってオープンスペースは、かつてのようなつくりっぱなしの空き地ではなく、どのように活用するか、その後の管理や運用のあり方までが問われるようになりました」と出口さん。

現在、一定以上の敷地をもつ多くの建物や街区の再開発には、施主が中心となって組織するエリアマネジメント協議会が発足し、管理の責任や方法を明らかにすると共に、イベントの開催など、さまざまな活用方法が建築計画と平行して検討されるようになっていく。ここには民間ならではのユニークな方法論も生まれ始めていて、今後は活用を前提としたオープンスペースのデザインやシステムのあり方も工夫されていくだろう。たとえば渋谷駅周辺のリニューアル計画では、地上2～3

階までは公共に開かれた建物であることも条件の一つに盛り込まれていた。オープンスペースと接する建築の表情(デザイン)のあり方も、これからはより重要な課題となっていくに違いない。

「建築はわかりやすいシンボルですが、訪れた人の印象に残るのは、やっぱりオープンスペースやそこで出会うモノやコトなんですね。建築は延べ床面積で経済的価値を数値で示すことができますが、オープンスペースには定量的な評価基準がありません。イベントスペースとして貸し出すなど、民間が工夫するソフト的な活用によって、そこに直接の経済的価値が生じることもあり得ますが、そうした経済的価値以上に、まちのなかに(良い環境)をつくるのが、そのまち自体の総合的な価値を高めることにつながっていくという面が積極的に評価されるべきだと思います」と出口さん。

とはいえ、それも現在はあくまでもスポット的で、「敷地内のできる範囲の整備にとどまってしまう」と、出口さんは指摘する。やはりそこには、地区全体のバランスや連続性、ネットワークのあり方から都市やまち全体の最適化を考える、都市計画、あるいはアーバンデザインの視点がぜひとも必要だと考えられる。

都市やまちの資質としての オープンスペース

「現在では、都市計画の考え方も大きく変わってきています。ももとの都市計画は、増え続ける人口を前提とし

て、その器となる都市をどのように計画したらよいかを考えるものでした。私の恩師である大谷幸夫先生が『空地の思想』(1979年)で空地(オープンスペース)の重要性を説いたのも、高層ビルが林立し、過密化していく都市空間に対する危機感からでした。しかし人口減少が決定的となった今、こうした前提は逆転しています。首都圏を始めとする大都市中心部はまだ人口が集中し続けていますが、地方のまちは、駅前ですら容積率のアップがボーナスにならないくらい需要が落ち込んでいます。むしろ人の密度を上げ、賑わいをつくり出すための空地(オープンスペース)づくりにシフトしている」と、出口さんはオープンスペースにかかわる、もう一つの大きな問題を提示する。

こうした都市やまちが迎えつつある大きなターニングポイントに対して、市民、行政、専門家が協同するオープンスペースとしての「姫路駅北駅前広場及び大手前通りプロジェクト」(兵庫県)をプロデュースし、現在は「豊田市都心環境計画」(愛知県)で駅周辺を中心としたまちのトランジットモール化を推進する小林正美さんは、とくに地方都市においては中心市街地を活性化することで周辺に散る人口を集める「コンパクトシティ化」の可能性を指摘する。

「まちの中心部に魅力的なオープンスペースがあれば、環境の価値を高め、その地域の人口を集積させる一助となると思います。それと同時に、コンパクトになったまち全体が、歩くことができる距離の中で利便性の高い生活が

できること、しかも歩いて楽しいまちであることは重要です。それを民間の自主性だけに任せることはできません」

小林さんは、札幌、富山、池袋などで展開されている専門家と民間が協働したまちづくりの成果を認めながらも、日本では確立していない職能としての「アーバンデザイナー」の必要性を強く主張する。やはり個々のスポット的なオープンスペースの活性化だけでは、都市やまちは形成されていかない。オープンスペースのあるこれからの都市やまちづくりのモデルの一つとして小林さんは、1960年代にニコラス・ハブラーケンが提唱した「オープン・ビルディング」の考え方を紹介する。

日本では、建物を「構造(スケルトン)」と「設備や内装(インフィル)」に分け、使う人がカスタマイズやリフォームがしやすい建築設計として流布しているハード中心の「オープン・ビルディング」の考え方だが、ハブラーケンはもともと都市計画や住民参加のような社会的思想もその視野に入れていたという。つまり、アーバンデザイナーがインフラなど都市の基本的なフレームワーク(サポート)を構築し、そこに生まれたそれぞれのオープンスペースは、官民協働や民間主体によって自由に組織され運営されていくという考え方だ。そのように大きな視点での都市計画とそれぞれのスポットの活性化が融合した時に、オープンスペースは、まちを構成するより重要な要素となっていくのかもしれない。

「ヨーロッパの都市は周囲を城壁で囲い、その限定の中でまちをつくりましたから、オープンスペースは(図)としての重要性をもっていました。日本は駅などを中心として、拡散的にまちができていきましたから、オープンスペースが(図)になりにくいんですね。そこを何とか、そこに生きて生活する人たちに意味のある(図)にしようと、今の若い人たちが挑戦しているわけです。もちろん(地)から(図)へと、その価値を転換することも大切ですが、これからのオープンスペースは(図)と(地)を分ける境界そのものをなくしていくことを考えていくことも重要だし、面白いことじゃないかと考えています」と、小林さん。

それはたとえば槇文彦が言う、まちの襲ひらのような「奥行き」や、小地形よりさらに小さな土地の皺しわのような「微地形」であるかもしれない。あるいは内と外の両義性をもった「縁側」のようなスペースかもしれない。しかし大切なのは、いつでもどこにでも成立するようなニュートラルなオープンスペースではなく、その時、その場所であることを強く感じさせるオープンスペースではないだろうか。真壁さんはそれを「まちの資質としてのオープンスペース」と表現する。それはまちの文化や歴史を映しながら、常に新しい記憶を紡いでいく媒介ともなるだろう。これからの日本の都市やまちにどんなオープンスペースが生まれ、そこでわれわれがどんなふうに快適さを得て、幸せを感じるができるのか、今後も注目していきたい。

Let's Greening! 緑のまちづくり

一般財団法人第一生命財団と公益財団法人都市緑化機構が共催する「緑の環境プラン大賞」は、生活の質の向上、コミュニティの醸成などに役立つ、緑豊かな都市環境の形成を目指す緑化プランに対し、助成を行う事業だ。2017年度には「シンボル・ガーデン部門」「ポケット・ガーデン部門」の2部門に対し、国土交通大臣賞2件、緑化大賞2件、コミュニティ大賞9件に加え、特別企画として「おもてなしの庭」大賞1件が選出された。今回は、「シンボル・ガーデン部門」で国土交通大臣賞に選出された緑化プランを訪ね、整備の状況などについて伺った。

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十賜

循環型の農園カフェを目指す、野菜・果物畑

兵庫県神戸市「みらいおもいけ園グリーンガーデンプラン」

2017年、神戸市の知的障害者施設の民間移管を受け、生活介護事業所と就労継続支援B型の多機能型障害サービス事業所としてリニューアルオープンした「みらいおもいけ園」。運営する社会福祉法人みらいでは、移管後に施設を新設。2階建から3階建に増築し、新たにショートステイ機能を設けたことに加え、1階の玄関ホールからつながる形で交流スペースとしての部屋も設けた。大きなガラス窓から自然光が差

し込む、温かな雰囲気の間だ。「この交流スペースでは、いずれ、施設の利用者さんたちで運営する〈カフェ〉をオープンすることを計画しています」園長の福本礼さんはそう教えてくれる。しかも、そのカフェで提供する食事に使う野菜や果物も自分たちで育てようというのが、この計画のポイントだ。そのための菜園・果樹園づくりを目指して「みらいおもいけ園グリーンガーデンプラン」を作

成。「緑の環境プラン大賞」に応募すると、見事、シンボル・ガーデン部門国土交通大臣賞に選出された。

里山のような庭づくり

農園用地は、もともと運動場として利用されていたグラウンド、約1316㎡。施設側からなだらかに下る傾斜地となっている。このため、施設から少し張り出した交流スペースは柱で支えられたピロティ型で、



●中央が「みらいおもいけ園」園長の福本礼さん。右は事務課長の阪井章訓さん。左が造園家の堀江聡さん

左●運動場だった敷地に針葉樹を粉碎したチップを敷き詰め土壌を改良。右手、小屋の奥が果樹園となっている

右●大きなクスノキの向こうに見えるのが、カフェになる予定の交流スペース。その手前、短冊状に、変化をつけながら配置されているのが野菜畑だ



●園庭に出てきた利用者は、率先して庭仕事をスタート。今では庭仕事も、楽しみの一つになっている



た。

カフェを地域の交流拠点へ

午後の庭仕事の時間になり、利用者が出て来た。野菜畑に水をあげたり、雑草を取り除いたりと熱心に作業を進めていく。そうしてひと仕事終わると、小屋に吊るしてあるハンモック型のブランコに揺られたり、カキノキの下のベンチに座り、リラックスしたひと時を過ごす。以前は運動する時以外、ほとんど屋外に出て来ることはなかったというが、今では、豊かな自然に包まれた園庭でくつろぎながらおしゃべりをしたり、お茶を飲んだりする時間を、とても楽しんでいるようだ。

この春で、庭が完成して1年が経つ。農園としてはまだ途上だが、利用者の作業の熟練具合や作物の様子から、当初、カフェがオープンできるまで5年程度は必要と考えていた目標を、最近、3年後へと改めた。その頃には、里山のような、人と自然が調和した循環型の環境が構築され、利用者と地域の人々とが垣根なく交流できる、温かな場所が誕生しているはずだ。



●作業の後にはベンチや小屋で一休み。屋外で過ごす心地よさを満喫

園庭に対して宙に浮かぶように配されている。室内から見ると、眼前にはクスノキの大木がそびえ立ち、まるでツリーハウスのように、緑に包み込まれているような感覚だ。

園庭に出てまず感じるの爽やかな木の香りだ。これは、敷地いっぱいに針葉樹を粉碎したチップが敷き詰められているため、土壌の抗菌や保水、微生物による土壌改良などの効果があるらしい。

クスノキの足元から先には、土を入れ替え、盛り土をした野菜畑が設けられた。ナスやピーマン、ブロッコリー、空芯菜まで、さまざまな野菜が植えられている。さらにその先、以前は廃材置き場のようにしていた場所には木造の小屋を建て、農機具の収納や、作業の合間の休憩スペースに。小屋を境に、若干、傾斜が強くなっているエリアが果樹園だ。石を積み、段々畑のように整備された一帯には、ブルーベリーやミカン、ナシ、イチジク、アボカドなど、さまざまな果樹が1本ずつ植えられている。まずはたくさんの果樹を栽培してみて、手入れがしやすく、環境にあった種類を、今後増やしていく予定だという。またその一角には堆肥をつくるためのコンポストも設置

された。

こうした園庭の整備・設計を行ったのは、同法人と以前から付き合いのあった造園家の堀江聡さんだ。堀江さんは、「まずは土壌を改良して土を豊かにしていく。落ち葉や枯れ枝、草むしりなど、日々の掃除で出るものもコンポストにして土に還していきます。この庭では、見た目の美しさよりも、里山のような循環型の仕組みをつくっていくことを一番大切にしています」と教えてくれる。

園庭にはさらに、日々の手入れや野菜、果物の栽培を担う利用者の健康面・精神面の向上も期待されている。福本園長は「まだ完成して半年程度ですが、その点では大いに効果があると感じています」と言い、「以前は、植物に触ることさえ苦手だった人も、今では庭での作業時間を楽しみにしています」と笑顔で言葉を継ぐ。また、事務課長の阪井章訓さんは別の視点から、「就労継続支援B型事業所なので、利用者さんがカフェや、カフェで使う食材をつくる農作業などの〈仕事〉をし、その対価として〈工賃〉をお支払いすることができます」と、カフェの運営と農作業には、民間移管されたことに伴う機能があることも説明してくれ

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

2018年11月、一般財団法人第一生命財団による

第6回（2018年度）「待機児童対策・保育所等助成事業」の助成施設が決定した。

今回は全国の新設保育所及び認定こども園より215件の応募を受け、

厳正なる審査の結果、42件を選出、総額2979万円が各施設に贈呈された。

そのなかで今回は、園児たちの命を守る防災備品を充実させた熊本市の保育所を訪ねた。

取材・文・photo: 斎藤夕子

熊本市東区 ドレミ保育園 防災意識を高め、子どもたちの「命を守る」

2017年8月、熊本市東区に認定型小規模保育所として新設された「ドレミ保育園」。園長の坂田紀子さんは、もともとは少し離れた場所で、約30年にわたり認可外保育施設「ドレミリズム保育園」を運営してきた。しかし、2016年4月に発生した熊本地震により園舎が大きな被害を受け、その継続を断念。現在の場所に移転すると共に、定員20名、0～2歳児を預かる小規模保育所として新たなスタートを切った。「熊本地震の時は、震度7は2度とも夜で、子どもたちが親元にいる時間でした。ですが災害は、時間や季節を問わずにやって来ます。その時の備えだけはしっかり行っておきたいと思い、私たちの保育園では月に2回、地震と火災の避難訓練を行っています」と坂

田園長。そこで今回の助成では、避難グッズが入ったサバイバルバッグと避難車兼用のお散歩カート、避難先で使用するパラソルに加え、哺乳瓶の殺菌保管庫を導入した。

地震発生時の避難訓練

そして今日は、地震の避難訓練の日。消防署にも協力してもらい、避難時の誘導や、一時避難先での対応が適切かどうかを確認してもらうと共に、日頃の心構えなどについてもレクチャーしてもらうことになっている。

なお、避難訓練スケジュールは、地震発生(16:00)→室内にて避難(机の下)→室外に避難移動。この間、幼児1名怪我(頭を打つ)を想定→消防署に通報。避難先は300mほど離れた秋津



●赤い外壁が愛らしい、平屋建てワンルームの「ドレミ保育園」

三丁目公園で、到着後は、1.シートの上に座らせる(2歳)、避難車(お散歩カート)上(0、1歳)、2.防護シート、水などの配布、3.引き渡しカードを見て保護者への引き渡し、4.消防署の方のお話。そして16:30に解散といった具合だ。ちなみに、都合のつく保護者にも、公園に集まってもらっているという。



左●非常ベルの音と共に避難訓練スタート。泣き声も聞こえるが、多くの園児が落ち着いて机の下に避難している

中●防災頭巾をかぶって、掃き出し窓からお散歩カートへ乗り込む

右●消防署員も見守るなか、秋津三丁目公園へ移動



左●公園に到着すると、すかさず人数確認

中●シートに座った園児たちは、静かに落ち着いている

右●消防署員にも手伝ってもらいながら、保護者への引き渡し訓練。この後、園長から保護者への挨拶、消防署からの講評などを経て、本日の避難訓練は無事終了



「非常ベルを鳴らしますし、机の下に入るのも怖いので、どうしても驚いたり怖がったりして、泣いてしまう子がいます。それでも、繰り返し避難訓練をしているうちに子どもたちも理解できてきて、落ち着いて行動ができるようになっていきます。泣いている子を気遣うなど、心の成長にもつながっているようです」

さて、16時が近づいてきた。消防署員も到着したようだ。すると間もなく、坂田園長の合図で非常ベルがなり、子どもたちと一緒に机を囲んでいた職員がガタガタと机を揺らす。「地震です! 避難して!」「机の下に入って!」と子どもたちに声をかけながら、頭を低くするように促すが、途端に泣き声も聞こえてきた。揺れがおさまると、次は玄関ではなく、間口の広い掃き出し窓に移動。そこから園児は全員お散歩カートに乗って避難するのだ。子どもたちは順番に防災頭巾を被せてもらい、次々と抱きかかえられカートに移動していく。お散歩カートは全部で3

台。1台は立ち乗りの大型カート、2台は6名が向かい合わせに座る対面式のお散歩カートで、今回の助成により、このうち1台が追加された。対面式の方が、子どもたちが安心して座ることができるそうだ。1人、職員に抱っこされているのは怪我を想定した女の子だ。

秋津三丁目公園につくと、さっそくシートが広げられ、パラソルも立てられた。この日は春らしい暖かさだったが、パラソルは、夏の日差しや雨からも子どもたちを守ってくれる。そして園児の人数が確認され、避難バックに入っていた防護シートを配布。園児の写真付きの引き渡しカードと、集まっていた保護者を照らし合わせ、子どもたちの引き渡しも完了した。

この間には、スタート時こそ泣いていた子どもたちもすっかり泣き止んでいた。職員の行動も終始迅速で、実にスムーズな避難訓練が行われた。消防署員からも高い評価を得ることができた。ただ坂田園長は「今日は避難訓練ですから、みんな落ち着いて行動できましたが、これが本当の災害時だったら、混乱することもあると思います。避難訓練にやりすぎはありません」と、いっそう気を引き締めるように語った。

地域に根ざした保育所として

「ドレミ保育園」のある熊本市東区は、

熊本地震の際にもっとも被害の大きかった益城町に隣接するエリアだ。現在の園舎の場所は、周囲に小学校や市のコミュニティセンターなども建つ安全な地域だが、ここに移転するにあたっては、都市計画上の規定に伴い、認可外での保育所新設は認められなかったそうだ。

「この地域は、自衛隊駐屯地が多く、女性も看護師などの仕事についておられる方が多いため、保護者のお仕事時間が不規則なこともあり、認可外でしか対応できないニーズもありました。現在は認可型で小規模なので、従来と同じような対応は難しくなりましたが、できるだけ、地域の方々のお役に立つ保育を、これからも続けていきたいと思っています」

坂田園長はそう言って笑顔を見せる。実は、まだ認可外保育所だった熊本地震直後には、園児以外にも、共働きの震災復興作業に当たらなければならなかった保護者らの子どもたちもできる範囲で預かった。しかし認可外であるため、公的な支援物資が届きにくいなどの苦労もあったという。ただいづれにしても、これまで30年以上にわたり、地域に根ざし、多くの子どもたちを見守ってきた歴史と経験をもつ保育園は、今後も、地域の子どもの安心と安全を支える拠点として、大きな役割を果たしていくに違いない。



●坂田紀子園長

噂の

「駅前」探検

第3回 川崎駅

イラストマップ:小夜小町

川崎駅は1日42万人の乗降客がある首都圏有数の大規模駅だ。川崎駅周辺は、江戸時代には東海道の宿場町として栄え、1960年代には重化学工業を中心に屋台骨として日本の産業を支えてきた。現在は、多摩川から臨海部にかけて最先端の研究施設が多数あり、全国でも最も研究者の就業人口が多い都市として知られている。もはや川崎に「京浜工業地帯」というイメージは希薄だ。川崎駅西口の明治製菓跡地の「ソリッドスクエア」を皮切りに、音楽ホールの「ミュージア川崎」、東芝工場跡地には「ラゾーナ川崎プラザ」が誕生し、それらを取り囲むように、オフィスビルやタワーマンションが立ち並ぶ。東口にもエンターテインメント施設「ラチッタデッラ」、商業施設「川崎モアーズ」や「ダイス」、地下街の「アゼリア」、そして、昨年、JR川崎駅と直結する大型商業施設「アトレ川崎」が誕生。また、2020年には水族館もオープンするという。高度成長期のシンボリック存在であった川崎。今、文化・エンターテインメント・消費の一大エリアへ舵を切り始めた。



今尾恵介

いまお・けいすけ●1959年横浜市生まれ。フリーライター。旅行ガイドブック、地図・旅行関係の雑誌や地図・鉄道関係の書籍の執筆を精力的に手がける。(一財)日本地図センター客員研究員、(一財)地図情報センター評議員など。著書に『地図で解明! 東京の鉄道発達史』(JTBパブリッシング、2016)、『今尾恵介責任編集 地図と鉄道』(編著、洋泉社、2017)他多数。

東京駅から東海道線の列車に乗って約17分、多摩川を越えれば神奈川県である。その下流部の名を付けた「六郷川橋梁」を渡ったすぐ先が川崎駅だ。現在でこそ人口150万を超える政令指定都市の代表駅であるが、ここに初めて汽車が通じた明治5(1872)年といえば、まだ前年まで東海道五十三次の川崎宿で伝馬制が行われており、おそらく江戸時代そのままの風景だったのだろう。幕末の天保14(1843)年における川崎宿の家数は541軒、そのうち本陣が2、旅籠が72軒。宿内の人口は2433人であった。

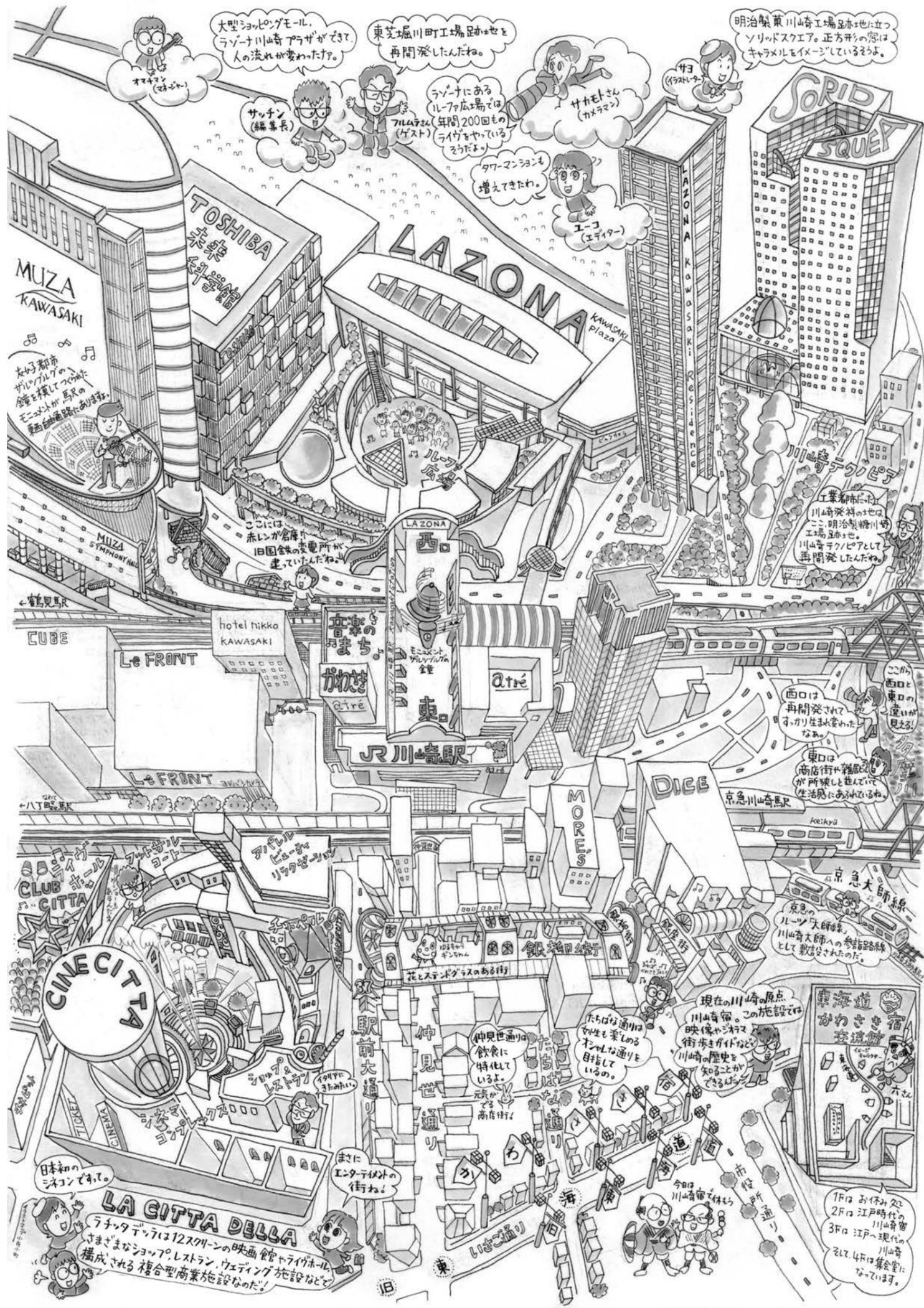
この宿場の家並みの中に明治4(1871)年に開店したのが小宮呉服店(後に小美屋に名称変更)で、昭和2

(1927)年には京浜電気鉄道の川崎(現京急川崎)駅前に鉄筋コンクリート4階建ての店舗を構えたという。当時はもちろん川崎市で唯一のデパートである。戦後になって空襲の被害から再建された昭和30年代にここへ転職したのが筆者の父であった。百貨店でのさまざまなイベント企画も担当していたようで、「納涼お化け屋敷」などあれば、父に連れて行ってもらったものである。マクドナルドのハンバーガーを最初に食べたのも、県内ではだいぶ早くにこの米国流ファストフード店を迎えた小美屋でのことであった。

正月になると例年父の同僚や部下たちが大勢わが家に押しかけ、朝から晩までジャラジャラと牌をかき混ぜる音

が響き、それに興じる大人たちの楽しそうな声が家中に満ちていたものである。思えば対応する母も大変だったに違いない。それでも子供たちには熱烈歓迎で、その理由はポチ袋入りのお年玉だ。当時の小美屋は同族経営だったので、偉いさんはみんな「小宮さん」。だから小川町に住む小宮さんは小川さん、武蔵小杉在住なら小杉さんと地名で区別していた。

五十三次の旧東海道は六郷橋のたもとで今の第一京浜(国道15号)から外れて西へ向かい、本町から駅に近い砂子、例の小川さんの小川町(小宮呉服店創業の地)を経て八丁畷に至る。最後の八丁畷は駅名にもなっているが、文字通り長さ8町(約873m)の田んぼ



の中のまっすぐな土手道(縄手)であった。ここまでの緩い弧を描くような街道は、かつてぐると内側に蛇行していた多摩川の旧河道の外側で、ちょうど自然堤防上の微高地にあたるから、宿場の立地としては浸水防止の見地から合理的だ。

そういえば、父が小美屋に勤めている頃もその後も、おそらく平成になる頃まで川崎駅の西側は工場で占められていた。多摩川寄りが明治製糖、そして南武線ホームのすぐ隣が東芝の工場である。ホームから手が届きそうな場所の一等地に巨大な工場が建設されたのも、明治製糖が横浜製糖として明治39年(1906)年、東芝が前身の東京電気川崎工場として同41年という早い時期に進出したからだ。当時の駅の西側を明治40年頃の地形図で確かめると、横浜製糖の場所には数軒の家と田畑、東京電気の方は前述した旧河道の田んぼしかない。思えばこの2つが川崎への大規模工場進出の嚆矢である。まだ当時は京浜工業地帯としての海岸の埋め立ても行われていなかった。

明治期の国鉄川崎駅は、現在京急川崎駅の南側をくぐっている道を西へまっすぐ行った突き当たりが正面口で、今より少し東京寄りだ。その駅前では客待ちの人力車が屯していたという。川崎の名所といえば駅から3kmあまりの川崎大師で、徒歩で行くには少々遠いので、彼らの一番のお客さんといえば大師への参詣客であった。ところが明治30(1897)年、川崎と大師を結ぶ大師電気鉄道が設立されたのである。同32年1月21日の初大師の日に東日本初の電車として営業運転を開始した時点では、起点が当初の川崎駅

前から六郷橋のたもとに変更されていた。

これは人力車組合「だるま組」が電気鉄道の敷設に激しく反対したからで、妥協策として川崎駅から六郷橋までは人力車、そこから大師までを電車で棲み分ける方法がとられたためである。明治33(1900)年4月頃の「横浜貿易新聞」(現神奈川新聞)に掲載された広告には、「川崎停車場ノ傍京浜電気鉄道切符売場ニ就テ人力車ト電気鉄道ノ聯絡切符ヲ購ヘバ徒歩ノ勞ナクシテ大師ニ至ル」とある。

そのうちほとぼりが冷めたのか、3年半ほど後の同35年9月には川崎駅すぐ近くまで延伸された。ここが現在の京急川崎駅である。この頃にはすでに「京浜電気鉄道」と改称して品川、神奈川方面への線路を建設しつつあるが、まだ六郷橋始発だった明治33(1900)年に出た空前のベストセラー『地理教育鉄道唱歌』が、この前年にできたばかりの電車を「梅に名をえし大森を すぐれば早も川崎の 大師河原は程ちかし 急げや電気の道すぐに」と早くも4番の歌詞に織り込んでいる。

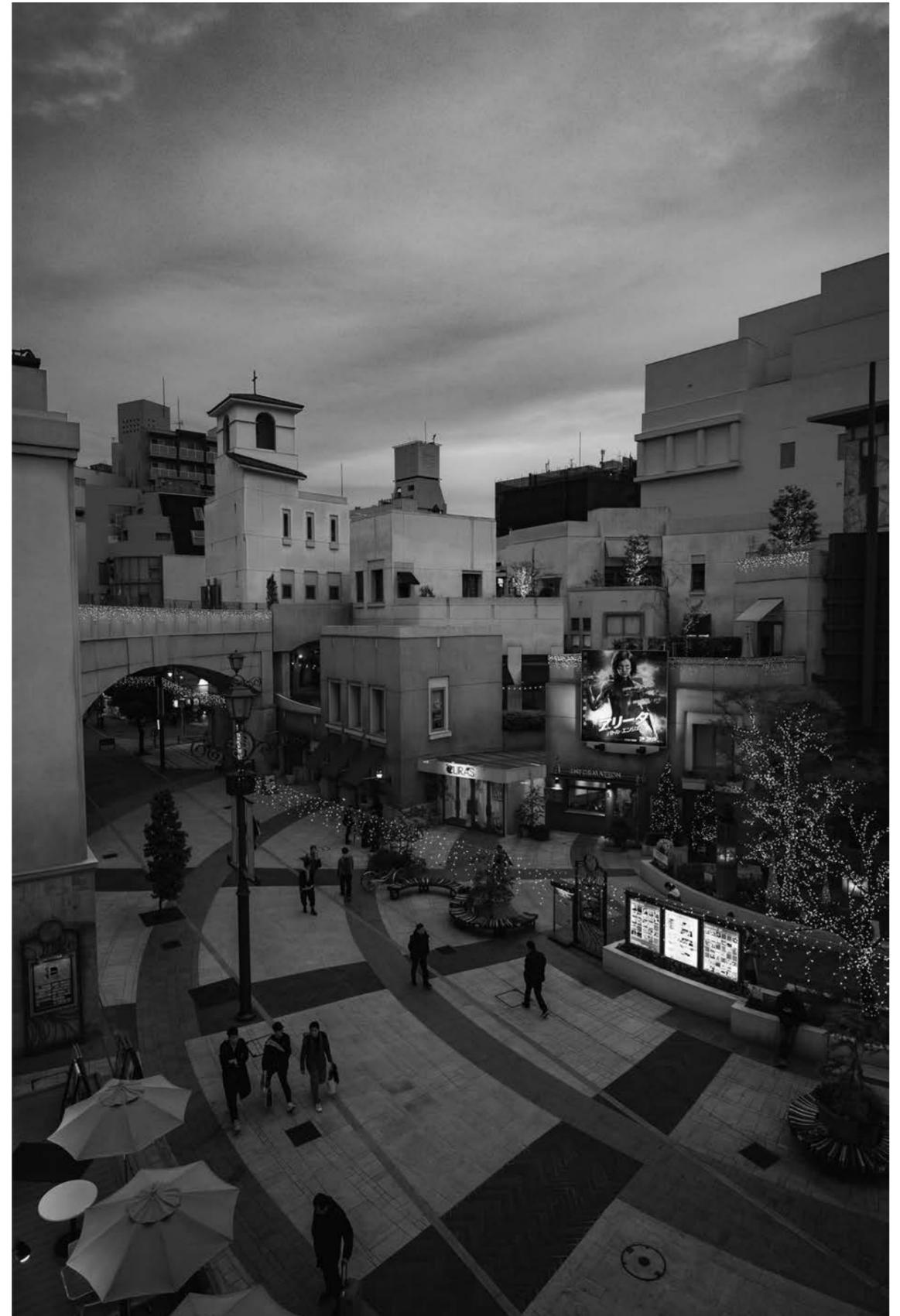
ここに出てくる大師河原という村名は川崎大師の所在地で、明治期にはナシ、モモ、ブドウ、イチジクなどの果樹栽培が盛んだった。大正にかけて特にナシが急増したが、品種改良に尽力した村の当麻辰次郎はその後、屋号の「長十郎」を冠したナシをヒットさせて全国的に知られるようになる。

川崎駅の西側に南武線が乗り入れるようになったのは昭和2(1927)年のことだ。当時は私鉄の南武鉄道で、多摩川の砂利と奥多摩方面からの石灰石

が主な貨物と目されていた。石灰石の行先は川崎駅ではなく途中の尻手で分かれた支線の終点・浜川崎で、ここは大正6(1917)年に創業開始した浅野セメント川崎工場があった。当初は東海道本線からの貨物支線のみが通じていたが、これに石灰山から鉱石を運ぶ南武鉄道が加わったのである。それでも旅客列車は川崎駅始発で、昭和4(1929)年には立川まで伸びて全通した。

第二次大戦中になると鉄や石油など資源不足が深刻になった上に鉄道も軍需輸送優先となっていく。奥多摩の石灰をより大量に必要とした製鉄、セメント業界の出資で新たに奥多摩電気鉄道(青梅線の御嶽から先)の工事も始まった。情勢が緊迫化する中で鉄道当局は重要路線の強制買収を決めている。これは全国22社1063kmにも及ぶ大々的なもので、昭和18(1943)年から翌19年の間に、関東では鶴見臨港鉄道(現鶴見線)と南武鉄道、青梅電気鉄道(現青梅線)、相模鉄道(現相模線)の4社が買収された。

そして平成の終わろうとする今、長らく川崎のイメージであった「工場の町」は大きく変わろうとしている。前述の明治以来の工場は西口から姿を消してショッピングモールやタワーマンションに転じた。東京駅から17分という近さは魅力なので若い世代も入ってくる。東口では馬券を握りしめたオッサンたちの中にファミリー層も混じり、労働者の町という雰囲気も薄まってきた。思えばこの変化は川崎だけでなく、ある意味で「筋肉質」だった日本の国が別モノへと変貌する姿そのものかもしれない。



イタリア古都の雰囲気を醸し出すエンターテインメント施設「ラ チッタデッラ」 photo.坂本政十賜

今号と関連する特集号をPick Up
(その他は特集タイトルのみ)

No.1	特集「都市の幹線道路」	(1984.2)	在庫切れ
No.2	特集「都市公園」	(1984.5)	在庫切れ
No.3	特集「都市と河川」	(1984.12)	
No.4	特集「子どものための都市計画」	(1985.6)	在庫切れ
No.5	特集「都市と盛り場」	(1985.12)	
No.6	特集「都市生活と神社仏閣」	(1986.5)	
No.7	特集「住宅地の道路と家並み」	(1986.9)	
No.8	特集「都市とヒューマンスケール」	(1987.3)	
No.9	特集「都市と水辺」	(1987.7)	在庫切れ
No.10	特集「都市の景観」	(1987.12)	在庫切れ
No.11	特集「都市と防火」	(1988.7)	在庫切れ
No.12	特集「都市とアメニティ」	(1988.12)	在庫切れ
No.13	特集「都市と運河」	(1989.8)	
No.14	特集「都市再開発とアーバンデザイン」	(1989.12)	
No.15	特集「アミューズメントと都市」	(1990.3)	
No.16	特集「高齢化社会と都市」	(1990.6)	在庫切れ
No.17	特集「私鉄と歩んだ都市」	(1990.9)	
No.18	特集「都市とホール」	(1990.12)	
No.19	特集「エコロジー都市」	(1991.3)	
No.20	特集「新・集合住宅論」	(1991.6)	
No.21	特集「新・リゾート論」	(1991.9)	
No.22	特集「都市と商業空間」	(1991.12)	
No.23	特集「都市の民俗誌」	(1992.3)	
No.24	特集「都市と緑化」	(1992.6)	
No.25	特集「公共建築のデザイン」	(1992.9)	
No.26	特集「都市と高層ビル」	(1992.12)	
No.27	特集「住宅の間取り」	(1993.3)	
No.28	特集「都市と広告」	(1993.6)	
No.29	特集「都市の上水道」	(1993.9)	
No.30	特集「都市の保存」	(1993.12)	
No.31	特集「ミュージアムと都市」	(1994.3)	
No.32	特集「プレハブ住宅」	(1994.6)	
No.33	特集「都市の色彩」	(1994.9)	
No.34	特集「観光都市の条件」	(1994.12)	
No.35	特集「都市と下水道」	(1995.3)	
No.36	特集「マンションのメンテナンス」	(1995.6)	
No.37	特集「都市と歩道空間」	(1995.9)	
No.38	特集「ゴミとリサイクル」	(1995.12)	
No.39	特集「住宅の水まわり」	(1996.3)	
No.40	特集「都市の駐車空間」	(1996.6)	
No.41	特集「橋のデザイン」	(1996.9)	
No.42	特集「建築と木材」	(1996.12)	

No.43	特集「輸入住宅」	(1997.3)	
No.44	特集「都市と学校」	(1997.6)	
No.45	特集「環境共生型まちづくり」	(1997.9)	
No.46	特集「都市と情報化」	(1997.12)	
No.47	特集「老いない住宅」	(1998.3)	
No.48	特集「都市と駅舎」	(1998.6)	
No.49	特集「住宅のコスト」	(1998.9)	
No.50	特集「路面電車ルネサンス」	(1998.12)	
No.51	特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう—集客都市へ」	(1999.3)	
No.52	特集「シルバー・ハウジング」	(1999.6)	
No.53	特集「NPOとまちづくり」	(1999.9)	
No.54	特集「地域のノード、公共施設の新潮流」	(1999.12)	
No.55	特集「都市公園の未来」	(2000.3)	
	●「都市公園」から「公園都市」へ 進士五十八		
	●インタビュー 都市の中のエコロジカルなネットワーク—都市公園に求められるもの		
	●コラム 「公園」におけるアートの可能性—札幌芸術の森		
	●ルポ インダストリアル・ネイチャー—三つのエコロジーが会う場所		
	●ケーススタディ 都市を“自然”へひらく—エムシャーパーク、持続可能なまちづくり		
	●ケーススタディ エコロジーパーク—都市公園の新しい姿		
	●連載 高齢社会のまちづくり・4		
	●連載 都市を拓いた人々・33 横浜		
No.56	特集「まちづくりの新しいパラダイム」	(2000.6)	
No.57	特集「島のまちづくりに学ぶ 沖縄編」	(2000.9)	
No.58	特集「地域に開く大学」	(2000.12)	
No.59	特集「危機管理のまちづくり」	(2001.3)	
No.60	特集「保存—都市と建築、過去と未来をつなぐもの」	(2001.6)	
No.61	特集「30代建築家の都市イメージ」	(2001.9)	
No.62	特集「使う建築、使うまち—都市のストック活用法 国内編」	(2001.12)	
No.63	特集「LETS的まちづくり」	(2002.3)	
No.64	特集「『都心居住』のまちづくり」	(2002.6)	
No.65	特集「都市はアートで刺激される」	(2002.9)	
No.66	特集「ランドスケープ・デザインの新展開—地形を活かしたまちづくり」	(2002.12)	
No.67	特集「スローライフとまちづくり」	(2003.3)	
No.68	特集「サステナブルな都市“成長”政策—都市計画と長期ビジョン」	(2003.6)	
No.69	特集「吉祥寺—住みたい町ナンバー1の理由」	(2003.9)	
No.70	特集「緑の建物づくり」	(2003.12)	
No.71	特集「都市と観光、新たな視点」	(2004.3)	
No.72	特集「構造改革特区とまちづくり」	(2004.6)	
No.73	特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」(2004.9)		
No.74	特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市[論]の現在」	(2004.12)	
No.75	特集「マルチモーダルが都市を楽しくする[ヨーロッパ編]」	(2005.3)	
No.76	特集「路地・横丁空間からの都市再生」	(2005.6)	
	●対談 路地はなぜ必要か 安原秀＋橋爪紳也		
	●サーベイ 復活! 法善寺横丁—蘇った路地空間		
	●路地・横丁Report [大阪編]		
	●路地・横丁Report [京都編]		
	●ルポ 路地はコミュニティ—「向こう三軒両隣」のまちづくり		
	●ルポ 「路地っぼさ」を演出する—路地の時代の商業施設		
	●インタビュー 路地から見る都市の未来 青木仁		
	●綴じ込みMap 路地・横丁Report [東京23区編]		



No.77	特集「公共空間、新たな視点」	(2005.9)	
	●インタビュー 「公共性」の三つの概念 齋藤純一 / 町家文化の公共性 谷直樹 / 「鈍さ」の公共空間 町村敬志 / 移動・転移・変転する公共空間 毛利嘉孝		
	●写真ルポ コモンの風景—公共空間を探しに行こう! / 1.法然院—京都市左京区 / 2.けんか広場—東京都練馬区石神井台 / 3. MARUNOUCHI CAFE—東京都千代田区丸の内 / 4.ノリタケの森—愛知県名古屋市中区 / 5.とんぼりリバーウォーク—大阪市道頓堀川 / 6.ブルームーン—神奈川県—色海岸 / 7.神谷町オープンテラス (浄土真宗本願寺派光明寺)—東京都港区虎ノ門 / 8.海とのふれあい広場—大阪府堺市築港 / 9.どんぐりひろばプロジェクト—愛知県名古屋市中区 / 10.サロン・ド・カフェ・こもれび (自立生活サポートセンター・もやい)—東京都新宿区小川町		
	●公共空間の変容と社会的排除—ニューヨークの事例を中心に 小玉徹		
	●ルポ 公共スペースとしての海の家 渡邊裕之		
No.78	特集「小さな町の豊かな暮らし」	(2005.12)	
No.79	特集「都市の「良質な」居住環境」	(2006.3)	
No.80	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすずめ①」	(2006.6)	
No.81	特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」	(2006.9)	
No.82	特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」	(2006.12)	
No.83	特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」	(2007.3) 重版	
No.84	特集「サイクリング・シティの可能性」	(2007.6)	
No.85	特集「地図とまち—見る・歩く・つくる」	(2007.9)	
No.86	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすずめ②」	(2007.12)	
No.87	特集「「美味し国」の景観論—フランス、都市景観の新たな創造」	(2008.3)	
No.88	特集「美味しいまちづくり」	(2008.6)	
No.89	特集「都市を愉しむいくつかの方法」	(2008.9)	
No.90	特集「シュリンキング・シティ—縮小する都市の新たなイメージ」	(2008.12)	
No.91	特集「都市彩譜—まちのいろどりのふ」	(2009.3)	
No.92	特集「fun town—たのしい・かわい・やさしいまちづくり」	(2009.6)	
No.93	特集「マチとムラの幸福のレシピ」	(2009.9)	
No.94	特集「創造のまちづくり」	(2009.12)	
No.95	特集「団地ルネサンス」	(2010.3)	
No.96	特集「風と土のインダストリー 地産産業の未来」	(2010.6)	
No.97	特集「新しい公共交通—生活支援ネットワークへ〜」	(2010.9)	
No.98	特集「下北沢から「都市」を考える」	(2010.12) 在庫切れ	
No.99	特集「「学校」からのまちづくり」	(2011.3)	
No.100	特集「21世紀のまちづくり 「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」	(2011.6)	
No.101	特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい—再生・復興への視点」	(2011.9)	
No.102	特集「交流住宅—新しい暮らしのかたち」	(2011.12)	
No.103	特集「時間に暮らす」	(2012.3)	
No.104	特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」	(2012.6)	
No.105	特集「「町おこし」新潮流—地域に埋もれたコンテンツを発信する」	(2012.9)	
No.106	特集「子どもの空間とまちづくり」	(2012.12) 在庫切れ	
No.107	特集「シティホール—市庁舎の新潮流」	(2013.3)	



No.108	特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」	(2013.7)	
	●視座 隙間をどう捉えるか 三宅理一		
	●インタビュー 1.「隙間」からの都市デザイン 吉松秀樹 / 2.「スキマ」が文化を生む! 増淵敏之		
	●ケーススタディ 憩い、賑わう、新しい「隙間」 東京都新宿区「モア4番街」 常設のオープンカフェを実現した、大都市・新宿の小さな街路空間 / 大阪市船場地区「太閤路地プロジェクト」 ビルの「隙間」に息づく歴史空間 / 東京都台東区「2k540 AKI-OKA ARTISAN」 ガード下に生まれたアルチザンの街 / 栃木県鹿沼市「ネコヤド商店街」 小さな路地から商店街へ		
	●イラストコラム 街のすきま猫ストーカー1~4 麻生ハルミン		
	●震災復興Report・5 住民参加のまちづくり提案を通して、「街なか」に住むことの意味を探る……宮城県石巻市「コンパクトシティ いしのまき・街なか創生協議会」		
	●私の好きなまち・くらし・7 Omiya on my mind—わが心の大宮 玉浦雅明		
No.109	特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」	(2013.11)	
No.110	特集「都市とサイン」	(2014.3)	
No.111	特集「自由が丘—暮らしやすさの秘密を探る」	(2014.7)	
No.112	特集「新しいパートナーシップ—PPP>PFI> コンセプション方式」	(2014.11)	
No.113	特集「新しい図書館」	(2015.3)	
No.114	特集「空き家—家と暮らしと地域のこれから」	(2015.7)	
No.115	特集「酒とまちづくり」	(2015.11)	
No.116	特集「ロスト近代と都市の未来」	(2016.3)	
No.117	特集「建築とまちづくり」	(2016.7)	
No.118	特集「空き地カルチャー 多孔隙都市の可能性」	(2016.11)	
	●ケーススタディ 空き地が育む、自然と食とコミュニティ 東京都練馬区 みどりのまちづくりセンター / 東京都日野市 セツ塚ファーマーズセンター / 東京都世田谷区 農の風景育成地区 / 千葉県柏市 カシニワ制度 / 千葉県千葉市 手づくり公園まさご		
	●レポート 佐賀発、「空き地」から始まるまちづくり		
	●対談 スポンジ化から見えてくる、本当の豊かさ 小泉秀樹×山崎亮		
	●連載 スキマファイル・9 吉祥寺、なぜの三角スキマを探して。		
	●連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・9 ろりぼっふ泉中央南園 / てんじん保育園		
No.119	特集「〈ゲストハウスの) 的まちづくり」	(2017.3)	
No.120	特集「ライフスタイルとしての「防災」」	(2017.8)	
No.121	特集「夕方からのまちづくり」	(2017.12)	
No.122	特集「これからの住まい・くらし—やわらかい都市へ」	(2018.4)	
No.123	特集「みんなでつくり、みんなでつかう」	(2018.8)	
	●鼎談 「みんなの家」と公共性 伊東豊雄×齋藤純一×小泉秀樹		
	●ルポ 人と町をつなぐ「みんなの家」		
	●ケーススタディ 「みんなの」新しい場所 ヨコハマ・アパートメント / 31VENTURES KOIL (柏の葉オープンイノベーション・ラボ) / グリーン大通り・南池袋公園 / MAD City / まちのこども園 代々木公園		
	●連載 Let's Greening! 緑のまちづくり・1 「もみじの庭」をお裾分けするポケット・ガーデン		
	●連載 子どもたちの笑顔に会いに行く・14 ハビネス保育園		
	●連載 噂の「駅前」探検・1 品川 今尾恵介		
No.124	特集「生まれ変わる街—渋谷・新宿・池袋」	(2018.12)	
	●ルポ-1渋谷 「100年に1度」の大リニューアル		
	●ルポ-2新宿 2040年を見据えた大改造		
	●ルポ-3池袋 「まち全体が舞台」の劇場都市へ		
	●インタビュー 東京をさらに魅力ある都市に 岸井隆幸		
	●エッセイ 大丸有マンハッタン構想 日端康雄		
	●連載 Let's Greening! 緑のまちづくり・2 「日本代表」にふさわしい、歴史を紡ぐバラ園		
	●連載 子どもたちの笑顔に会いに行く・15 認定こども園頌栄保育園		
	●連載 噂の「駅前」探検・2 東京駅 今尾恵介・小町小夜・坂本政十郎		

2018年度研究助成公募課題決定

今年度実施の第28回研究助成には61件（一般研究42件、奨励研究19件）の応募がありました。2019年1月に開催した審査委員会で10件（一般研究5件、奨励研究5件）を選定し、3月の理事会において決定いたしました。助成対象となった研究課題は次のとおりです。

2018年度研究助成対象課題（応募受付順・敬称略）

	研究課題名	助成金額
一般研究	復興期間の終了後における原発避難市町村の長期復興政策に関する研究 川崎 興太（福島大学共生システム理工学類 准教授）	130万円
	集合住宅のHOAと自治体の「戦略的相互関係」によるまちづくりに関する日米比較研究： 責任領域の交錯と共創の視点から 菊地 端夫（明治大学経営学部 専任准教授）	100万円
	立地適正化計画における地方都市郊外住宅市街地の「選別」に関する調査・研究 野澤 康（工学院大学建築学部 教授）	140万円
	原発被災地域への移住者の住生活に関する研究 窪田 亜矢（東京大学大学院工学系研究科 特任教授）	140万円
	東日本大震災で死亡した役場職員と遺族の住生活と心の復興に関する検証調査研究 麦倉 哲（岩手大学教育学部 教授 地域防災研究センター 兼務）	130万円
奨励研究	都心回帰に伴う住宅ストックの変動による市街地再編の実態と効果に関する研究 —大阪市西区、住之江区を対象として— 蕭 闊偉（大阪市立大学工学部都市学科 講師）	70万円
	瀬戸内海における地域構造に関する歴史的考察 樋渡 彩（近畿大学工学部 講師）	70万円
	我が国の都市計画における歴史・文化の尊重と位置づけに関する研究 —地方再生コンパクトシティモデル事業の事例分析— 藤岡 麻理子（横浜市立大学グローバル都市協力研究センター 特任助教）	80万円
	北海道ニセコ地域における外国人居住者の生活実態と広域まちづくり計画 野村 理恵（北海道大学大学院工学研究院 准教授）	70万円
	水辺空間をめぐる観光と住民生活の共存可能な政策論の構築 野田 岳仁（法政大学現代福祉学部 准教授）	70万円

information

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/>

購読のご案内

年3回（4月・8月・12月）発行、頒価500円＋送料実費

定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください、ご希望の号をお求め願います。

city@life no.125 Apr.-Jul. 2019

2019年4月発行

企画委員	日端康雄（慶應義塾大学名誉教授） 陣内秀信（法政大学特任教授） 大村謙二郎（筑波大学名誉教授） 小泉秀樹（東京大学教授） 木下庸子（工学院大学教授・設計組織ADH代表） 小野文夫（当財団常務理事） 佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）
編集・発行	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社アルシーヴ社 斎藤夕子
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社エイチケイグラフィックス 頒価500円＋送料実費

